# 川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Senryu Zasshi

Pensoj flugas trans la land - limon

九・十月號

# 川柳語原考〔上〕

—今日的意義と遡源的研究—

福田山雨樓

## 序論

柄井八右衛門の雅号「川柳」が詩系の名称となつた史実を尊重すると共に、八右衛門が何故「川柳」と号したかの心事、意図を忖度してそこに或る意味を見出したい。私見は創作的見解を過ぎないが、いささか科学的、客観的、推理的な根拠を以て臨んだつもりである。われ〳〵がこの道につながつてゐて「川柳」なる名称に満足し、憧憬してゐる以上、「川柳」の名はわれ〳〵の結晶した氣持の表われである。そのことから川柳の本質を演釈することも出来る。川柳の名は柄井八右衛門の問題であると共に、實はわれ〳〵の身内の問題である。昔の委であると同時に現実の枠でもある。またこれからの在り方の問題でもある。

## 川柳の雅号の生れた機縁

柄井八右衛門が川柳なる号を選んだわけは、あくまで主観的なものでその意図、由來機縁についての文獻が乏しいので、元よりその眞意を知る由もないが、

一、新編柳樽十九輯の夜宴の序には、その住居たる幾草の新堀端を取り「その河岸なる柳をもてその儘号とせられ」(注1)とあるのが唯一の文獻として依拠することができるものであらう。その他研究家の忖度したものとして

二、享徳元年(川柳が生れる七年前)出た前句附の書「俳諧花畠」には、句主の表徳も、一柳、柳女、柳角、鬼柳、青柳心柳、柳枝、柳泉、河柳、揚柳、工柳、夏柳、柳水、女柳大柳、柳川、柳線等柳の字の有る者十七名を算するのは、後に川柳の号を選んだのに何等かの縁故があつたように感ぜられる。(注2)

三、又も何となく萬葉の「霞ふり遠つ近江のあと川柳、枯るれども又生ふてふあと川柳」などを寓してあるような氣がする。(注3)

注1、2、3共岡田朝太郎著寛政改革と柳樽の改版による。尤もこの内萬葉の説に対して故劍花坊は反対してゐた兎に角以上の何れもが命名の心事に触れた手がかりであらう。

自分はこれ等の説を補足し強化し、或は附会して、次の文献、知見を紹介しつつ考察を進めたい。

一、前句附抜書誹風柳多留を「いもせ川柳樽」と題したのは吳陵軒可有(木綿)であるが拠つて來るところは点者柄井川柳に因み、川柳が柳を好んだ心持をくんで勘案したものと見ることができる。

二、遺吟「木枯やあとで芽をふけ川柳」と詠んだ心持は、柳樽の將來を祈念したものであるが、同時に川柳翁が新風俳諧に一生を捧げ、熱愛しつづけたこころがこもつてゐる因に故久良伎翁は「柳多留某編序文中に、百年吾志を知る者出でん、と初代川柳翁が遺言したとあるそうだ」と番傘昭和十四年十月号でのべていられる。

三、川柳翁は名を求めぬ人であつた。別号に無名庵と称したこともその人となりが表われてゐる。故市川番茶子は「初代川柳翁のみが持ち得て、現代人に看出せない一事があるそれは默々として求めることなき実行の不断である。凡そ無形の栄冠は求むるものに與えられないのが天則、唯求むることなく、勉むるものにのみ最高の德望が集り、この有德人に対してのみ、永遠の生命と無限の力が與えられる」と初代川柳忌偶感の中でのべていられる。(注1)川柳翁は別号を綠亭とも稱したが、これも柳に縁があり、川柳、無名庵、綠亭と統一のある一貫した雅号である。

四、柳の植物学的本性を探求して見ると、西川義方氏は「柳」と題して次のようにのべてゐられる。○柳の木は强靱性を持つてゐる。内に强さを蓄えてゐる。根が特に强く土を固め河岸護岸に適する所以である。枝も幹も强く命も永い。揚柳の種類は百六十種にも達すると云うことである。○柳の縁に身も心も染めて、雨中雨後の散歩を営むと云うことも、つまりは神の偉大を認め神の愛に抱かれんとする直ぐなる心の、止むを得ない活動であらう。○一握りの砂も踏めない都心で、銀杏樹やプラタナス、七葉樹のような直樹が、高層建築と背比べをして、人工に克伏され喘ぎ悩んでゐる時代に拔垂柳のみはあの强靱性を持ちながら日本少女のやうな謙譲を見せたり禪僧のやうな超脱を見せたりして雨に垂れ、風に靡いて清麗、輕淡、平明の姿態を成就してゐるのである。(注2)

百科辞典によると、河柳の材は灰として火藥製造に用いられる、とある。あの女性的な柳から火藥のやうな過激なものを作るのに用いられると云うことは、実に意外であるが、柳の本性にはそうしたきびしさ、强さが藏されているのであろう。

花言葉に、かわやなぎは自由を表わしている。

柳は陽木にしてしかも其質柔靱香氣ありて、口熱を去り齒を强くするの特效あり、故に古來より九重の上にも、御式目の御箸は御口細と称え柳の御箸を供御に備え奉る。隨て民間にも歯刷には柳を用いたり、しかのみならず其葉の縁は皇國天然の錦繡にして櫻と並び賞せらる。(注3)

枝垂柳は中華民國では樓柳(テイリュウ)と書く。木の聖だとまで讃えられてゐる(注4)

柳縁花紅——天然のままを

男女両性に作用する
プレホルモン
塩野義製薬
皮下注射・錠剤

いう。天眞爛漫の狀、禪家でさとりをひらいた形容にいう(注5)

江戸では太田道灌が神田川の堤に柳を植えたのが始まり(注6)

江戸時代、元朝、召使の先ず目覺めたる者、男女をいわず主人の前に罷り出で畏つて柳の下の御事申さう、と言揚すると、主人起き直つて、されば其事目出度う候、という(注7)

大体以上のような觀点から柳と云う風物詩を通じて、柄井八右衞門の人生觀が、「川柳」と云う雅号を生んだのではないかと思われる。柳が好きである、柳が自分の心持ちにぴつたりすると云う根拠には、なお次のようなことが數えられる。

一、人の心を和らげ、寛がせやさしくさせる、柔軟と云つた感じ、無抵抗主義の平和的感覺が大江戸の空氣にふさわしかつたこと。

二、柳の姿態は、浮世を達觀している態度、中道を歩む心持に通じる。

三、春柳の芽ぐむ姿は、新鮮味、生命感、悠久性を思わせ和歌に師匠なく、俳諧に古人なしの境地を暗示するものがある。

四、柳の風にたわむれるさまにはわだかまりがない。柳の美は一つの頂点を表わしてをり、素のうつくしさ、一つの理想を示している。

五、都会の風物としてふさわしい情緒がある。アダツぽいところ、多少なまめいた感じを與える。不思議な吸引力、魅力を持つている。丸木砂土氏はかつて、散歩道の魅力、柳の俳句的存在、と云う言葉を使つたことがある。

六、秋から冬にかけて柳の葉が散つた姿には、素朴、枯淡を示し、忍従のわびを藏している。その寂しさにもまた趣がある。寂さの底にもやがての一陽來復を思わすあたたかみが流れている。

七、西尾國務大臣の處世觀、「とかく人は風の吹き廻しや動く雲に氣を取られがちだが私は川端柳のように水の流れを見て暮らす方です。今度の組閣に際しても私は、世論の流れを見つめて迷わず棹さしてどうにか組閣を終り、全くホッとした。」(注8)

柄井八右衞門が前句附の点者として立つたのは、先代から名主の役目を引継いだ翌々年、彼の四十才の頃であるが前句附は彼の生れぬ數十年も前から流行していたものだし彼は青年の頃から俳諧の道に參じ、前句附の妙趣を味わつたものだと思われるので、雅号を選んだのも青年時代だつたかも知れぬ。または俳諧の門から前句附の畑え代つた機会に、川柳と更めたのかも知れない。自分が選択したのかも知れぬが、俳諧の師が命名したのかもわからない。これらは如何に詮索しても文献の見当らない限り知る由もないがいづれにしても川柳と号して以來、一生を通じて川柳道に盡したことは、「よほどの固い信念と」一貫性、不動性をもつてゐたもので、またよく時流を洞察し人心に投じたものと云わねばならない。因に、川柳の俳諧の師は蓼太だとの說があり、その蓼太に「むつとして戻れば庭の柳かな」と云う有名な句があるが、これは天明の頃のもの(子規俳話、松羅玉液)と云うから仮りに蓼太が師であつたとしても本稿には無関係である。

(注1、番傘昭和十三年十月号、注2、同十一年八月二十一日毎日新聞、注3、柳屋第三十五号同三年五月号、注4、平城異聞同四年五月二十九日号、注5、漢和大辞典、注6、報知新聞同十二年六月二十四日並木座談会注7、國漢同五年六月号江戸時代の交際、蒼松散人、注8、同二十二年六月二十日毎日新聞)

## 手紙

不朽洞山房へ來た通信の中から

拜啓　お手紙をいただきありがたうございました。炎暑の折柄、お変りもなくお慶び申上げます。先生の還暦祝賀大会は大変な盛会で――終戦後これだけ集まつた句会は無いでしょう――結構でした。先生にして見れば、俺は四十八才位の気持で居るのに、寄つてたかつて六十一に、しよつたと、いささかヒッタリと來ず、少しうろ〳〵して居られたやうに見えたのも、側から見て、ほゝ笑ましく嬉しいことでした。今日は立秋ですが、私のやうな街の小百姓には、だん〳〵と楽しい季節となつてまいります。私は工場の近くに約廿坪ほどの休閑地をやつて居ります。トマト、甘唐辛子、ささげ、茄子、さつまいも、なんきん、大豆人參……と慾張つて居りますが、なか〳〵たのしみなもので、さつま芋は五、六貫位は収獲がありそうです。なんきんも十程とれます戰爭からこのかた、朝顔、コスモス……などといふ大衆になじみの深い花までが忘れられがちで、ちよつと街にその姿を見せなくなつたのはさみしいことで、私は休閑地へ堂々と花を作つて居ります。肥料不足――これには、なやまされます。馬糞ひろい位では負付かず、いつそ自宅から下肥をバケツにでも入れてこつそり電車で運ぼうかとも思ひますが、もし経済の巡査に米や麥と同様に取調べられたら赤面しなければならんと――これは出來ぬ話です。

私の試みてゐる「DONの夕」の季題川柳は別に俳句へ挑戰するとか、柳俳無差別運動とか何とかいふ大それたものではありません。たゞ日頃から「自然」を詠みこなす練習もして置く必要があると思ふからだけのことです。先生の「夕櫻…」「秋さらり…」「君見給へ…」にしても又奥さんの「糸瓜もう…」「こほろぎよ…」「もう秋の雲が…」「へちまへちま…」にしても、こういふ名品も日頃から「自然」に対する関心があればこその傑作だと思ひます。川柳の対象とする社会人事が終戰このかたゴチヤ〳〵として來たのを反映して川柳もいさゝか句品が低下したのは止むを得ないとして、こうした時代に季題川柳が少し位混ざつてゐることは殘跡に一本の夾竹桃を見出したやうな清涼感がないでもなく、又やみ屋とチボとパンパンとで、ごさくさしてゐる駅のプラットホームの壁にひよいと一輪の活花を見出すのも、ちよつといゝものです。まア〳〵こういふ軽い意味で「DONの夕」は毎月二十五日の夕方からドン喫茶店へ集まつて貰つて居ります。先月は投句十六名、出席九名ありました。中には十四才の中学生も混つて居りました。いづれ春、夏、秋、冬を完成してから小冊子にまとめて見やうかとも思つて居ります。

來る十七日には、渋寺支部と阿倍野支部の主催、大毎と南海の後援で諏訪の森海水浴場で納涼句会を催すことになつて居ります。貴志子さんもたしか兼題「妖怪」の選者に内定して居る筈です。お繰り合されて御出席をお待ちいたします。今日から、いよ〳〵殘暑ですが、暑さに負けないやう御健康お祈りいたします。

敬具

八月八日立秋の日

須崎豆秋拜

廉生霞乃様 机下

にきびとり美顔水
桃谷順天館

# 川柳塔

兵庫縣　奥村丹路

ひしと抱き寄せるもの子の他になし
おともだちの死にふれて來た八つの子
子に與ふ手毬いきなりころびゆく
この道はどこへゆく道子を連れて
私は商人まづ〳〵酌ぎませう
愛すべく愛されるべく子の丸味
女房のあくびはつきりもらうなり
馬は田にいくさはすでに終りたり
財産税以來ぼん〳〵氣の毒な
けだものの爭ふごとき恋やせむ
恋のおろかさ逢うては誓ふいくたびか
花嫁はむかしながらに手をひかれ
いつ果つるともなく朝の靴をはき

兵庫縣　戸倉普天

獨り居の共つれ〳〵に蠅叩く
オールには自信か女を二人乘せ
貸ボートビルの晝間に見下され

天橋立文珠行

智慧の餅今は無いのを淋しがり
八万圓の牛で田を鋤き酒も飲み
よく見れば男ではなし買出し屋

大阪市　浪玲之介

親方の儲けを知らぬ馬の汗
演劇史裸で踊る所まで
も一人の自分吹殼拾ひかけ
復興もまだコホロギの島の内
天皇の漫画をそつと燒き捨てゝ

大阪府　米本貴志子

橋筋で金の乏しさ胸に來る
チビ〳〵と使ふお金に腹が立ち
百姓の頭テカ〳〵マンドリン
左前シーツ洗つて雪のやう
継はぎの服かと聞けばはやりとか
めたてとぎオヤ學堂によう似てる
やればすぐ返へすお人に肩が凝り

横濱市　福田山雨樓

路郎先生の還暦を祝す（二句）

山莊に飄々と來て野の遺賢
智を越えて聖に近づく六十一
白雲を友とし病む身任さんか
ゆゆしきは又肉身が肺を病み
対山をわが庭と見て牛乳うまし
雲を見てボカンとしてる物忘れ
青柿の微風微熱が飛んでつた

尼崎市　水谷鮎美

握手して鼻と鼻とのひかりよう
活版になりたる恋のうつけもの
冷水摩擦恋のメガネを拭いてゐる
凸凹の疊に亡父のなつかしく
貸浴衣ひさしぶりなり陽がまぶし
二人して泳げばあおき底がみへ
先生の裸服をぬげ飯を食へ

旭川　宮田不二

先生は霞を吸ふと言ふベース
的確に且つ迅速に金錢が減り
ミスボリスの顔に見惚れて轢れかけ

奈良縣　西垣錦風

百圓で何も買へぬと拗ねてる娘
ませた智慧家の暮しが覗かれる
解決の後から物價又上り
掻き集め寄せ集めての葬儀代
吹殼をひろつて食へる世となりぬ
筍のように巡査の增へたこと
インフレに馴れた女房の金使ひ
一本の花を赤ちやんむしりとり

平塚市　木村孤浪

驛員は慌てないでと無理を云ひ
或る時はピアノの値段聞いても見
定期劵鋏の音をむだにさせ
中元は西瓜で候ところげ出る
眞青な田にすげ笠が二、三ゆれ

大阪市　市場浚食子

別條はなかろが夜は早よ帰れ
御覽ぜよ子は子で逢ひにゆく姿
馬鈴薯でも麦でも來たら買つときな
諦めてからはお酒で身をくづし
彼女の瞳うらむが如く射る如く
夢のない暮し萎びるばかりにて
好きだから近づくことを差控へ
人妻と言ふのに無理な夢を追ふ
親の氣も汲めば働くことも思ひ
格下げのリストの中に我が恩師

新築移轉の史葉君に

結婚と言ふのが次に待つてゐる

名古屋市　吉田水車

レデー今扇子の裏の大あくび
いよう生きてたんかと久しぶり

祝路郎先生還暦

雛壇の今日の先生若く見え

特急かつらぎにて

案内は飽かぬ眺めと申しけり

案内嬢惜しい事には無表情
造花など活けてかつらぎ如才なし
大阪市　須崎豆秋

啄木の眞似してカニにはさまれた
燒跡へもどはいづくにゐた鳩か
氣ちがひになる一線を支へてる
上げかたもひどいよ倍の倍の倍
清和源氏で闇屋にもなれず
冷凍魚あはれ目玉をむいたまゝ
蟻だけが砂糖主食と思ひきや
投票の筆を握つて名を忘れ
五十過ぎても土曜日の夜を更かし
温泉で遊んでゐても汗が出る
新聞の隅に小さく死んでゐる
松本市　石曾根民郎

春の夜のそばや情婦がちさく待ち
うつり香とはなれ理性はよみがへり
茶代置きすぎてふりむく旅の星
働きにゆく背のかたさ見送られ
編物のつゞきダンサーの素顏なり
汽車の窓をんなも夢を失はず
別れたい氣へ山脈のただ遠く
大阪市　竹内潮花

恋々と書いて拾圓はつて來た
夏やせよなぞと綺麗な歯で笑ひ
あの方に貰ひましたと拔いて見せ
うたがへば愛も悲しいものになり
妻しばし乙女にかへる水泳着
慰めてやれば綺麗な嘘で泣き
滋賀縣　北川春巣

棺桶の値段の話出るお通夜
口開いて寢てる我が子がフト淋し
タンサンの買溜めをして胃病死に
奈良縣　尾崎方正

還暦の父髭を剃り髪を分け
輿論には勝てず新生二十圓
ちぐはぐに着ても綺麗な十八九
遠足の帰り萎びた花提げて
自尊心の強さ女のおでこに見
大阪の土になります事務にゐる
大牟田市　高田抱逸

生理休女に少し肩を持ち
彫刻を大工としての眼で見られ
出來てゐるのに封建性の父母があり
保險屋に留守居の長女くたびれる
ドブロクを手品のやうに見付けて來
月末にお酒を貰ふ手が狂ひ
刑事から煙草一本程の情
知りつゝも明日の糧に煙草捲く
大阪市　木下幽王

二十代ふふんそうかと馬鹿にされ
税務署か巡査になつてしもたろか
君が持つからあやしまれる金時計
いつしか語る日もあらん此の社会
文樂の人形見たいに兒に被せる
如才なく半紙も入れる苦勞性
内心は妻も月給待ちわびる
奥様と奥様敬語でけんかする
明日もはくズボン枕の下にあり
遺言はしたがばあさんまだ死なず
天地鳴動して又増税の田殖え
可愛さ余つて産婆に叱られる
樂しみは朝な夕なの兒に移り
貞操を賣ればドレスも買へる身か
おでん屋で醫学博士とやらに会ひ
野荒しにやられた夜は風を聞く
大阪市　水谷竹荘

乳バンド締めてダンサー強く生き
アイロンへ旅の夫をふと思ひ
誘惑に勝つても食へぬ大阪だ
へそくりで買ふ宝くじ當りそう
三角な恋をお女將は知つてゐる
幽霊が裸になつた舞台裏
爪彈で待つ淋しさをまぎらわせ
お互に死後を約するむつまじさ
内閣は誰がいいのと女將喫ひ
廣島縣　弘津柳慶

長男がすね長女が泣いていらだつ日
子の物が目につく旅の闇市場
大阪市　稲葉鳩花

螢の光泣いて歌つた過ぎし日よ
生きてゐる姿だ情にすがるまひ
恋人の写眞も入れて旅に出る
兵庫縣　小澤史葉

待合に來れば社長もイーさんさ
病室で花を咲かせて病んでゐる
失恋のそれでも女化粧する
夏服へあはれなほどに骨を見せ
唇の赤さがきついアルバイト
兵庫縣　小西無鬼

コンパクト仕舞へば返事らしくなり
神戸市　大鶴喜由

糧は糧五七五は捨て切れず
刑思ひ家計を思ひ賣春婦
金よりも使感謝の辞が欲しい
彌次る声聊か食も満ちにける
双方に氣があればこそ寄る手摺
治したは君だと医長たかぶらず
立喰ひのしんみりと聞くメチール禍

女警官キリ、と見せる眉を引き
恐しさ拾ふて喫う氣俺に見る　大阪市　吉田斜水

この歳になつて色眼鏡が判たよ
財産が出來た証拠に犬を飼ひ
不自然に邦画キッスを取つてつけ
便所から入道雲が流れてた　愛媛縣　在間小樓

引揚げ來し街を詠ふ

非戰災都市の裏の裏に住み
非戰災都市の土をば握つて見
非戰災都市住友の名も変り　高槻市　手島一舟

寄合のなんと六ケしい人もゐる
単線を待つ間若さは歩き出し　茨木市　下山清潮

なつかしい綿のゆかたの肌ざわり
散髪と風呂と氷で百圓だ　大阪市　山口秋花

易そうに見えて娘もかたいもの
課長さんとして教養があやぶまれ　大阪市　南皷扇

お茶お花ダンスもやれて女事務
一應はまあそうだがと課長さん　高槻市　岡田紫雲

一人産めばもうやり込める妻になり
喫ふて見なはれ專賣局に負けまへん　大阪市　土井文蝶

二号さん向ふ任せで買ふ金魚
委託加工ロスを余計に見積られ　布施市　糸本醉月

正直がたたり妻子に苦労かけ
小役人政令違反にひつかゝり
信仰の有つて心も目も靜か

火の出ないマッチ配給してもらひ　布施市　大塚一球

逢ひ引と知らず螢は飛び交ひ
男子また生れ五月の風が吹き
心境の変化女で御座候
名乘り出た百万圓を読んで寢る
東條を恨み二十歳の後家でゐる
氣が弱い氣が弱いと女房よく叱り

路郎先生還暦祝賀川柳大会雜感(二句)

生甲斐を拍手でもつて迎へられ
平等な趣味へ挨拶交わされる　奈良縣　白牛奇朗

夫婦して競馬の留守をねらわれる
座席爭奪あんな元氣が羨まし　岡山縣　山分北路

お白粉を少し匂はす新学期
海へ行くバスが残した砂けむり
内職へ乳房もだしたまゝ坐り
末つ娘の心配誰もとり合はず
踏切で女の顏をつくづく見
此の夏のブラン淋しきメルバイト
物思ふ机あかりのまだつかず
顏と物顏と物とで就職し
正業はやつぱり眠いものと知り　大阪市　大西野介

ひとすじ遠く十字架に続くみち
竹のごとくやつれてもなほ主イエスよ
透きとほれとほれいのちよ玻璃のごとく
つきつめたこの娘のおもひまぶしいよ
燃えたまゝ氷の墓となりましよう　下松市　山根白星

パン食が好きな間借りのベレー帽
待たされたあげくめかくしされた恋

喰へるかね君の理想は牧歌的
人妻としての強さに逢ふた悔ひ
仕送りの子の名で母は皆預け
帶をさく逢ふて帰つた日の疲れ　今治市　月原宵明

祝路郎師還暦

還暦は近視のまゝの若さなり

廢井の地震

戰犯へ神の怒りはまだ解けず
澤庵を鼠を下げたやうに買ひ
夕焼へ蟹の威嚇のまともなり
濁流へ蟹が曲藝してる岸

○

奈良縣　廢生葭乃

夏知らぬ村が近づく山を越え
崖上の窓へ自轉車から話し
同じ村ながらトンネル二つ越す
あの峯にきのふと同じ雲遊ぶ
ジヤガ芋のくさらぬ世話に疲れきり
タイトルの消えるが如く子等に逢ふ　大阪府　池澤樂居

夜具白し保護色のないのみあわれ　清水市　冨士野鞍馬

薬瓶さげて女中を叱つてる
父の愛人に昔の惚氣きく　松山市　前田伍健

病床吟

病みつけばもう年寄の診断書
寢返りへ狸一升提げて立ち
すきなものくれたがそれが毒なもの
病んできく時計の捻子のゆるむ音
黍越しにねて見る雲も久しぶり

川柳漫釋

# 漫筆は動く〔四〕

小畑自由朗

**途方もない儲けのとこで起される**　米市

「どんならんな、かんぢんのとこで起しよつたら」
「何がかんぢんだんね」
「わえのあの鍍金のガヂヤガチヤ時計をや、純金の本物やとだまして、二万円に賣りつけて、もうちよつとで金を受取るとこやつたんや」
「まあおしい、それならそれと早よう云ひなはらんかいな」

**まねき猫料飲停止を知らぬのか**　草々

「しもたツ、今のんたしかにデカや」
「まあ、どないしまひよ」
「このまねき猫のど阿呆奴が」
「ほんまに心得のない、誰れなとまねいたらあきまへんがな」

**バスガールはみ出て春の風をきり**　綠之助

「あれ、あのバス共産党かいな、赤旗出して走つてるわ」
「阿呆、車掌のスカートが風にめくれて赤いこしまきが出てんねやがな」

**月を見て昔の人と同ぢ戀**　鞍馬

「まあお月様のきれいなこと」
「あゝ、素的だ」
「一月十七日のお月様もこんなんだつたんでせうか」
「さうですな、きつとこんなんだつたんでせう」
「ね、今から熱海の海岸へ行つて見ない」
「えゝ行きませう」
「でも、あたしをけとばしちやいやよ」

**年寄りの仲間にされて腹を立て**　綠雨

「まあ〳〵どうぞ」
「めつそうもない、私が床柱なんて」
「まあさうおつしやらづに、ぢや、お年順と云うことにして」
「お年順、と申しますと、私がなんですかいなそんなにふけて見えますかいな」

**改札に干支を聞かれてどぎまつけ**　圭井堂

「こんなお父うさんより一寸も大きな子供が半額の切符ぢやいけませんよ」
「せやかて、十四なら仕様がないやないか」
「ぢや、何年の何月何日生れですか」
「いそがわしゆうて、自分の生れた年もおぼえとらん位いやのに子供の生れた年やなんか覚えて居られるかい」
「ぢや、大きな坊ちん、あんたの干支はなんですか」
「こらツ、お前なにか、切符も切りくさらんと八卦見るつもりか」

**伸びる子にこんな挿畫は困ります**　梅窓

「ねお母あちやん、この画、おぢちやんとおばちやん、抱き合つて何してんの」
「まあ、坊や」
「ね、舌喰べ合ひしてんの」
「あなた、こんな本、子供の目につくところに置いちや駄目ぢやないの」
「何云つてるんだい、今迄お前が読んで居たんぢやないか」

**年下の男と歩くことたのし**　欣一

「ね、欣ちやーん、もつとどつかえつき合つてよ」
「いや、もう腹一杯でこれ以上這入りませんよ」
「まあ、たべることだけぢやないわよ」
「ぢや、どつかで映画を見ませうか」
「さうね」
「おばさんはやつぱり歌舞伎なんかの方がいゝですか」
「まあ、お、おばさんだなんてひどいわよ」

**失業に女だつたらとも思ひ**　鳳石

「君、どつかゑゝ口見つかつたか」
「さつぱりや」
「俺も弱つてんねや」
「闇屋にも強盗にも成る甲斐性もないもんやさかいに」
「ほんまにそうや、いつそわえらも女やつたらな」
「そうやがな」
「わえらの歳やつたら、まだうば櫻でいけんことあらへんやろ」

**長靴と下駄と別れた水溜り**　曉明

「あほらしい、あの妓をあのまゝ泣かしきりにしときなはつては男のみようががつきまつせ」
「はつ〳〵〳〵、エロ男力あまつて金足らずや」
「うざ〳〵云はんと、お近いうちにきつとだつせ、ぢやお待ちしとります」
「へいおゝけに」
「あゝえらい水溜りや、曉さん、あんた長靴はいてなはるなんとかしておくんなはれな」
「とかなんとか云うてわえに抱いてもらおうと思うてからに」

麻生路郎著　水武書房版

最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して敢むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書であることは刊行前既に注文の殺到してゐたのに見ても明らかであろう。敢て一読を薦む。

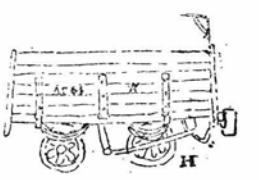
B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送料　金三〇円

取次御注文は　大阪市住吉區万代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

アメリカの駆虫薬
十二指腸虫
蛔虫
腸内寄生虫
コメット
アメリカ薬局方・四塩化エチレン
テトレン球
興田製薬株式会社
大阪　東京

通ばかりズラリと並ぶネツト裏　今治市文庫
思案顔スナツプ写眞かき乱し　同
用心が暑さをさらに暑くする　同
若人の知性間口が廣いのみ　同
着任の言にそむいて栄轉し　同
本論に入るに手間どる両夫人　同
いろ〳〵な逸話名妓の通夜は更け　上野市辰子
見習ひのなぶりのきかぬことを買ひ　同
岡惚れのねがほへひざをはすしかね　同
よりもどすはなれへ苦労する仲居　同
心中へ屋形も折れるひよくづか　同
腹心がキメをとどける大晦日　同
足袋えは飛鳥の如く坐り込み　大阪府瓜平
牛小屋の隣にタイル張りの風呂　同
構想の纏りかけへかなぶんぶん　同
一日を押しつぶされて床に入り　同
逆らわず流れず杭で生きんかな　同
煙草代組合幹部やめなはれ　鳥取市日満子
この腹になつてお金で済みますか　同
蒸タオル床屋忙しく研をかけ　同
歩かうという母親の荷が重し　同
古着屋にすらり賣ります鯉のぼり　同
爭議團ピース吸ふてるとは言わず　岐阜周峰
浮草のくらし闇買ひ誘はれる　同
佛様ですと火葬場それつきり　同
未亡人なやめば人の目に出逢ひ　同
歸還せぬ人を占ふ手が寂し　布施市のぶを
夕立へ御輿さんの威勢よし　同
釣銭はいゝよと云へぬ世となりぬ　同
使ふ身になればうかつに飲まされず　愛媛縣一風
買出しの上衣に乳がにじんでる　同
呼びに來たとこで怪談明日にする　同
薪割の外に取り柄のない養子　大阪市千舟
賣込みもいつか大阪弁に慣れ　同
大阪の医者も同じ診たてなり　同
おや〳〵　同人誌から請求書　東京都山椒亭
濡らさない水着孔雀のやうにくる　同
夜櫻の下で別れてそれつきり　同
早いものですよ子供に養われ　小松市茶佛
坐つても立つても妻は金の愚痴　同
子が一人だけの暮しへ金魚浮き　同
バーの畫名刺を持つた客が來る　新居濱市默紅
見廻して電話甘へた声になり　同
按摩させ乍ら話に今日の釣　同
山の家此處は避暑ではない一家　大阪市草々
オモチヤ屋の前はよそ見をさす話　同
九里丸の舌が拍手でまたもつれ　同
立話代用食の調理法　石川縣醉羊
白いめし大臣なんとも言はず喰ひ　同
氣怪さが買はれ小兒科よくはやり　同
功何級己が姿を見失ひ　鳥取市穂波子
お師匠の面子といふ腹も立ち　同
啄木を鼻で嗤ふて闇屋居る　同
父なき生活ミシン踏み馴れ　大阪市葉光
男世帯か掲示板読む　同
本譜も読めず歌手に憬れ　同
食えないといふ要求を嘘にされ　鳥取市盈之
あり余つた頃の話え母も出る　同
買出しの髭その筋にからかわれ　同
店先は喫茶離れは握り壽司　京都市志成
葬式は冬に限ると汗を拭き　同
産制の本をまじめな顔で買ひ　同
看護婦だけになるとにぎやか　石川縣義風

---



# 秋春筆雜

## 僕だけでせうか

姫路　夷一笑

故森東魚さんが路郎老青年と云ひ出されて以來それが自他共に許していた最も適当なしかも親しみのある愛称であつたのだが還暦は別として最近の先生から受ける印象は必らずしもこの愛称が適当であると思へないのは僕だけでせうか。

○

聞くところによれば一部柳人から麻生路郎の後継問題が出ているさうだが僕は別段この話が喜ぶべき事であるとも悲しむべき事であるとも思はない、たゞ柳界の將來を考へれば誠に当然なことゝ思ふだけである。

それは別として先生御自身は還暦が來ようが金婚式が來ようがいつ迄も老青年の氣持を捨てられないであろうと思はれるが何とか今後は少なくとも一週間に一日ぐらひほつとした隠居氣分を味はつて頂ける余裕を與へたいものであると思ふのは僕だけであろうか。

○

先生が外出の折にはいつも必らずお供をするもの、それは誰でも知つているあの愛用の古いステッキである幾ら白髪がふえたからと云つて、いくら老青年の愛称が不似合な様に思はれるからと云つてあのステッキ迄杖と云ふ感じはしない、やはり先生の場合ステッキと云つた方が似つかはしく思はれるのは僕だけでせうか。

○

先生がいつも口にしられる言葉の一つに趣味も趣味だがやはり生活の根本がしつかりしていなくてはとよく云はれる、そこで門人の一人一人にたへず注意の目をかゞやかせていて失業者と知れば就職を斡旋され商賣が思はしくないと聞けば仕入れ先と連絡を取り得意先を紹介してくれる又家庭のいざこざでもたのまれゝば片肌をぬぐその他にもいろ〳〵実話が秘されているが一体そこ迄熱意をしめしてくれる指導者が現在我が國に幾人あろうか、おそらく政治家と教育者と警官の三分の一がこれだけの熱意を持つてくれたらと思ふのは僕一人であろうか。

○

後継問題以前から僕はよくこんなことを考へた、それはもし路郎先生に今万が一の事でもあつたら我等の川柳雜誌はどうなるのであろうかと、これは随分以前からよくそんなことを思つたものであつたのだが最近後継問題が持上つていると聞くに及んであながちこれは僕一人の取越苦労でもなかつた様に思はれる。

遠近を問はず貧富の差をつけず門人に対するに常に平等であることは路郎門下であれば誰でもこれを呑めまいと思ふ、たゞ一つ家庭への訪問だけは富より貧の方を選ぶように思ふのだがこれも僕一人の考へ方見方でせうか。

草の出來へ馬の手づなを伸ばしやる　同
床掛をかけ替えもせず農夫春　同
善人のあつさりと損引受ける　新居濱虹二
アパートのくらしあなどる故郷の父　同
戰災のそれから箱の居士大姉　同
屠殺所から流行歌が流れます　宇部市栗美
あざむく爲の口紅でわありません　同
煙突の煙男の意欲昂りぬ　同
通されて書斉の本を羨んだ　岡山縣弓削平
後で喫ふ積りの吸殼すてられる　同
洋裝が田圃の母へ声をかけ　同
読經の父は闇屋の顔でなし　岡山縣笑泉
三代目遂に闇師に落ちぶれる　同
サクサクと土にリズムを刻む鍬　同
恋故に涼みの相撲負けられず　横濱市万年
お釣錢滿身創夷の紙幣が來る　同
同権へ勝手にしろと亭主負け　同
三年前建てたを大工恩に着せ　大分縣表情
粉袋は笑顔を乘せて帰つて來　同
おのろけはよせとあぐらを椅子にかき　同
アルバイト大阪弁でよくしやべり　大阪府きはち
心臓の強さの割に歌が下手　同
砂糖なめて瑞穗の國の夏を生き　同
日曜日印も定期も日曜日　和歌山宏方
商賣繁昌札吹き寄せて來る如し　同
聽診器置けば博士も鍬を持ち　同
九回目裏二死滿壘でラヂオ切れ　大阪市美水
駅からも村一番の壁が見え　同
上つたなアと最一度見直す請求書　同
若い日が恋しくなつた化粧する　山梨縣嘩子
子供また母の不幸を継ぐ嚠量　同
だまされた日の思ひ出のある時計　同
男また上手な嘘で産ませる氣　大阪市ひさみ
ちと変な男が窓でギター弾く　同
露路裏で二号まめ〳〵しく動き　同
大江戸の色氣のせまる柳腰　大阪市杭心坊
願はくは我が幸福の続け春　同
此の儘で歩かば細る道になり　同
賣喰ひの話昔の自慢が出　大阪市良子
病人の何でも彼でもやりたがり　同
あれからの我が家はずつと居喰ひです　同
生活苦負けまい皺の未亡人　愛媛縣曉風
末つ子の十へ二十へ慾が出來　同
旅鞄重し主食の三日分　同
故郷から便りパン〳〵涙ぐみ　東京市爲雄
インフレへ便利左官も年をとり　同
全快の蔭にパン〳〵一人ふえ　岡山縣七面山
あるぞ〳〵あの買出しの米を見ろ　同
残燭の如し月給月なかば　秋田縣夕帆
黒板を消すと忘れる子も混り　同
復員へ哀れ浴衣も襁褓なり　長野縣柳兒
共稼ぎ火のない火鉢に馴れて居る　同
恋人とベンチ背景は緣です　松江市孤呂二
通行禁止南瓜の花の盛りです　同
波頭おつかけられて砂にはひ　石川縣味平
勘定がすめば扇子は忘れられ　同
金持と思うはあんたの勝手だが　鳥取市秋男
追ひ出すは氣の毒だけど嫁がくる　同
名刺はつてもう三年になる間借　大阪府水滴
夢未だ拔けない妻の絵封筒　同
組合の幹部重役ほどに知れ　鳥取市重美
番台に教師を辞めた養子居る　同
千金の雨だ雨だえ茄子かぼちや　鳥取市民雄
新品の自轉車持つてくる養子　同

---

○

先生の長所でもあり短所でもあると思はれることが一ッ、それは人から譏られることを極度に嫌ひある時は恐れさへする、事実僕がこれまでたびたび先生のことを書いた稿が雜誌に発表されたことは一度もないおそらく此の稿も掲載されないのであろうと思うのだがよく句会の席上や誌上でも自分がほめられたりよく云はれるとこれに対していささか『おもはゆい』感じがすると云ふ言葉で片づけられる。僕はこの頃この『おもはゆい』と云ふ言葉をよく見討して見る氣になつた、そうして先生は案外の『はにかみ屋』であると云ふ結論に到達した還暦の日から子供にかへると云ふが先生は誠に少年の様に『うぶ』なところがあると僕は思ふ。

（七月三日稿）

# 川柳漫画愚見

漫画家　種瓜平

俳句には俳画があるが、川柳には未だ川柳画はないように思う。一般雜誌に扱われている川柳漫画は「川柳絵ごき」といつたものでないでしょうか。川柳漫画といえば大ていの人は往年のキングあたりに掲載されていた谷脇素文画くという。あれは非常に人氣もあり、楽しませてくれたものですが、私の印象では夫婦喧嘩、灰神楽、覗かれる行水といつた俗つぽい題材が多く、絵は達筆に丸顔に團子鼻大口開いて跳れ返つているものばかりのようでした。あの雜誌の読者にはその程度のものでも川柳普及の意義があるといえばそれまでですが、それでは麻生先生の川柳の意義「人の肺腑を衝く……人間陶冶の詩」にふさわしい絵とはどうしても考えられない。

現在の一般雜誌に載つている川柳漫画を描く画家は一應川柳を解する人達であろうし、漫画にも鋭い諷刺や人情の機微を描く場合が多いのですが、現在の我が國の氾濫する出版物の漫画は観念的にナンセンスやユーモアをもたらす頓智、機智のはつきりした題材を極端に表現するものが殆どを占め、恰も漫画とはそのような形式のもののみであるかの如く人氣を呼んで居ります。本來は文字と絵の相違こそあれ同一境地であるべき川柳の句境を全面的に單独の漫画として受入れられていないのであります。若し、川柳によくある人情の微妙な片鱗まで漫画化そうとするなれば相当な描写力が必要となりますが、描けたとしても漫画としての大衆の人氣は恐らく揚らないでしょう。つまり、現在の日本大衆はそのような漫画を解せず、育てようともせず、漫画というものはオチョクツタ絵であるとし、純粋美術に比して頗る貫録のない存在とされている。

こんなわけで、漫画家が川柳漫画を描く場合、多くの川柳のうち

アルバイト今では闇のこつも知り　兵庫縣正　司
半ズボンはけば淋しい彈の跡　同
隱居には腹をたてさす記事ばかり　石川縣光　郎
中味とは合はぬ社員の折鞄　同
日本へ來たが燕は戸まどいぬ　石川縣魯　木
円滿に別れましたと又嫁ぎ　同
社長の書一家を成すとほめて置き　石川縣山　々
檢察へ女会釈を軽く投げ　同
人間の弱さを時計早めとき　石川縣茶撫朗
招かれて憎まれ口も喜ばれ　同
赤ちやんをあやす片手はパンを焼き　大阪市花代子
未練とは思へど送る二三町　同
もみ手など出來ぬ氣性で小職人　熊本市室　久
大學をだして小使やつと辞め　同
赤い爪叱れば家出すると云ふ　東京都伊太古
吊皮へ毛が逞しいワンピース　同
御主人が内助へ廻る美容院　大阪市梅　里
海岸の見える家なり貸間なり　同
仲裁の今後は知つた事でなし　愛媛縣曉　明
家庭では娘にかへるミスボリス　同
自動車のきしみ院長來たらしい　大阪府宣　子
螢狩街で育つた声を出し　同
花一輪男の部屋をなごませる　大阪市定　美
恋もはや親を忘れる程になり　同
面白いカニだ鋏を立て直し　豐中市柳　堂
とつときの炭で魚がやけて居り　同
風車廻し飽きたる砂に差し　愛媛縣孤　峰
淋しさがぢつと鏡の中の我　同
商談に使ふ笑顔を大事がり　岐阜市巷　歩
生活がはじまる朝の庭をはく　同
看護婦が男なりせば淋しかろ　貝塚市一　郎
あるんかなこの子の看護婦にも彼氏　同
最善の手当の外に手を合せ　大阪市惠　風
配給も買へず夜逃げも出來ませぬ　同
値を聞いて一つ減らして買つてくる　大阪市桃　村
今日も又遅配が続いて梅雨の雨　同
クイックスローホールは暑さここへやら　大阪市葉茶子
地震なさへつちやらダンスクラブのレコード鳴り　同
野外劇濡れ場の裾で蟬が鳴き　鹿兒島痴　草
米をとぐ手つきやつぱり男なり　同
欺された後の涙は砂へおち　高槻市河童子
朝顔に負けず南京屋根をばひ　尼崎市早　苗
ピンポンのことから娘同志もめ　兵庫縣美代子
颯爽とノーストッキング蚤の痕　兵庫縣草　石
OKと派手なスタイル唇紅し　大阪市康　夫
飲むだけの樂しみ出來ぬ昨日今日　大阪市三　郎
塗りたての顔で待つてる退社ベル　大阪市小雅子
リズムも軽く鍬の先へ　春島根縣風　子
句の友が今日は患者になつてくる　岡山縣美　泉
春がすみ自轉車もゆつくりふんで行き　愛媛縣早百合
借金と菊と残して父は逝き　大阪市五　郎
職々の眞理を知らぬ成り上り　新居濱鶴　声
こゝにでも生きて見せると屋根の草　堺　市太　路
外交はよい事ばかり並べすぎ　香川縣朝　兒
キャンプにも行けず眞夏の氷割る　京都市競　花
坐右銘が未だ張られてる壁へ越し　長崎縣鈍　嚴
とむらひへ新しい下駄を履いて出る　大阪市拙　朗
雷鳴は又爆撃を思わせる　大阪府美智子
ゴロ〳〵と己が葉かげで南京寢る　佐賀縣八笑鬼
手招きに答へて行けば人違ひ　石川縣貞　人
この露地を代議士が出て覚えられ　今治市滋　路
集金へこの家のゆとり花を活け　名古屋可　香
民主々義明治の父母に逆らわず　鳥取市克　已
上等と云ふ部屋からは海が見え　大阪市梅　風

---

から漫画になりそうなものを選ぶその選ばれた川柳は必ず頓智のある動作のはつきりしたもののみに限られる。そんなはずはない、必ずどんな川柳でも一應は漫画化されなければならないはずだ。

ところで一例を

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句をいわゆる「漫画」に無理に嵌め込もうとするなら、下品な表現で、父が子供をさし上げて跳れている図や、嫁はんの太鼓腹を夫が打診している図にされる。これでは川柳作者が怒られるでしよう。そうなると、名句の殆どが漫画にならないことになる。これは「漫画」の観念からして改めねばならないのです。

では、こゝに川柳漫画に対する愚見を簡単に述べて見よう。

(1)絵そのものにわづかにユーモアを漂よわせ、川柳の内容を引立たせ、川柳が七の強さなら絵が三の力で付かず離れずの題材を選ぶ場合。

(2)画家が川柳作家の句境に喰い込んで川柳の内容を描き川柳と融合せんとする場合。

きりつめたところ以上の二つとなるが、そうなると前例の句に対する漫画は、(1)の場合は瓜を二つならべるとか、鏡に何かあしらうとか、そこはあつさり氣品を持たせるべきで(2)の場合はインテリらしい男が鏡を覗いて深刻な顔をしているとか、赤ん坊を抱いて顔を覗き込んでいる図であつても、そこは画家は句境を解し、川柳と二人三脚の共倒れにならぬような氣品を以つて鋭く表現しなくてはならない。作家と相談出來得れば尚更結構であろう。

## 隨想

名古屋　**吉田水車**

お金より重いものを持つた事はない、とは遊野郎に対する或階級のサン辞であるのだが今は重い程のお金を持つたやつが又巾を利かす。

戰時中にタバコを二つに切り又それを二つに切つてキセルで喫うた、終戰後三年目の今日又それをやつて居る。前者は品物がなかつたからで後者はたやすく買えるやうになつたけれど法外な値段になつたためである。

ロンドン、オリムピックでフインランドのザットベック選手が一万メートルマラソンで優勝したが五千で惜敗した。劍聖宮本武藏も佛像の彫刻には手先きを傷つけた

数多い淨瑠璃の内で義太夫が、(詳はしくは義太夫節)じようるりの代名詞になつて居る位であるがもしも川柳前の前句附が何かの声系的なものであつたとしたら川柳節として一世を風びしたに違ひない。

---

**急告**

▼十月三日の不朽洞会で「川柳まつり」事件が解決ざる限りは番傘主催の川柳大会へは不朽洞会員並に川雑関係者は不参すること▼大阪柳界革新委員会へ委員を送ること等を決議した

川柳不朽洞会
理事長　中島生々庵

川柳作家としての

# 朱樂菅江

冨士野鞍馬

朱樂管江(アケラカンコウ)は狂歌師として「あけらかん」の洒落からつけたもので、カンコウと呼ばれていたので菅公とつけたが、後道眞公に遠慮して公を江と改めた。本名は山崎景貫といゝ、字は道甫通稱郷助、準南堂、芥陀利華庵等の別號があり、朱樂館と書いた本もある。妻女も松歌と号して狂歌をよくした。川柳では專ら「菅江」として作句していた。牛込二十騎町に住んで、幕府の手先與力であつたから、その頃の社会狀態から考えて、相当權力を振つていたものと想像出來る。有名な蜀山人とも交り狂歌師としては著名の人であつた。寛政十年十二月十二日に六十三歳で沒し、東京中野の宵原寺にその墓があるので、久良俊先生在世中は毎年菅江忌を營まれていた。

牛込納戸町辺に時の健吟家門柳等と「蓬萊連」を組織して、前句付でなく題にもたれぬ独立句を作りはじめ、その月次集句をいつも初代川柳に選評を乞い、発表誌として、「川傍柳」という冊子を、柳樽と同じ花屋久次郎から出版して、安永九年に初編、天明元年に二、三編二年に四編、三年に五編と五冊で終つている。この「川傍柳」は正に初代川柳の選である。

柳樽二十四編には初代川柳追善の「玉柳」に、菅江は序文を書き翁の旧知といつているから、川柳の門人でもなかつたと思われる。そして旧知三人菅江、葉十、和笛で句評をしているが自句はなく、この選が柳樽として最初のハッキリした選者であつた。それより前の柳樽十五編(安永九)に

御不勝手郷土が娘嫁して來る

十七編(天明二)に

しだれ櫻へ飛つくと納所追い
女郎屋の掟をひよぐりながら
蔦み

の三句が見えるがこの外に柳樽には菅江の句は見当らない。

随つて菅江の作品は「川傍柳」の中にあるわけであるがこれも全五編三千五百句の中に僅か五十九句しか見えない。父が山崎景樹という國学者であつたから、その影響をうけて学者臭の句が多く、三面子博士もそれをいつて居られた。インテリ権門の菅江には今も同じエロ的の句も多く又狂歌的の句も見える。江戸時代の與力といへば大した権力を持つていたもので、現今の警察署長と検事正とを兼ねたような職で、一町四面の屋敷をもらい、馬に乘つていたのであつた。それで町人を主としていた前句師の仲間へはあまり廣く交渉をもたず、牛込住居の近辺の連中を集めて狂歌で有名であつた関係と、職掌柄とでその集團である蓬萊連の大將に推され、初代川柳と知友の間であるので選評してもらつていたのである。

安永九年は菅江四十五歳でこの頃から柳樽にも作品が見えて、「川傍柳」初編六百句中には二十句あり、その中から拾つてみると。

太郎が軒も笠木ほどみゆるなり
吉原土手から葛西太郎の屋根
が見えた
もてたやつ四つ手の外へ度々あまり
吉原歸りで昨夜は一睡もせず
のもて方
こん夜やらずばあたけ出しそうな婆
「あたけ」は化けて出るで、
婆はヤリテ
七所ばいをふくんで禮に行き
「ばい」は枚で学者臭の句、
鉄漿の禮に鉄屑をもらつた七
家へ廻る
呑むかして潮は内儀きついこと
鯛のウシヲは贅沢なもの
剃刀をあてると寝ててかぶりふる
幼兒の月代。菅江作品中の佳
句
人見しりせず喪見世へたれて來る
吉原の喪見世へ玩具に赤ン坊
を借りられる
切手のいらぬ田樂はまづいなり
豊島屋の田樂は大きくて安い
が不味
生涯を半分白歯にて踊り
「満足に產むと踊り子孫があり」橋町の振袖、半生を白歯でいたであろう。
行くべし〳〵と沓をぬぎ放し
鞠塚から吉原行、蹴鞠の沓を
ぬぐ、学者臭
女郎買だといわぬから母案じ
女郎買だといつても心配する
名代をもう帰ろうの番に付け
名代はオイランの名代で新造
二篇は天明元年の夏に出版されていて、菅江四十六歳、六百句中に十六句が見え。
四ツ目屋は利かぬと女房負けおしろ
四ツ目屋は本所の陰臭を賣つていた店
湯に入つて女房出勤いたすなり
湯△△酒△△。この句が天保九年の柳樽百四十六編に「仕り」として盗用されている。
行平も松ケ岡ほど居て帰へり
須摩の浦に三年いた、松ケ岡も三年である。
夜ふけ人しづまり肴あらすなり


清談・商談・お待合せに
喫茶 みどり
みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角


「きのじやに意地のきたない人だかり」
台のものの残りを喰い荒すことは常
おぼこ娘も祭から氣がそれる
人間の娘と魚のオボコとを掛けた句
六月十五日の山王祭から江戸ではオボコ網が許されたことをいつたもの
放馬座頭に娘ぶつつかり
「放れ馬いざり討死する覺悟」


血圧降下に
アーグレミン
錠剤 注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

廻狀に藝子の產んだ事も書き廻狀に花柳ニュースを書添える不良老年

大汐に松をかすつて猪牙舟通り吉原通いの猪牙舟は「首尾の松」に頭がさわつた。

三編も天明元年で蜀山人が序文を書き秋の發行、八百句中に十三句見える。

あしか四五疋つれて出るい、女郎「あしか」は海驢で新造がよくねむたがるのでその異名があつた

その夜れれるは水無月の神樂堂「不二の根にふりおく雪はみなつきのもちにけぬればその夜ぶりけり」の歌をきかしてのバレ

氏なくて兄はこわ〳〵馬に乘り妹は玉の輿、にわか武士を笑つた句は多い

蕎麥粉をつなぎに入れたを夜中賣り夜鷹そばの品質、ソバ粉が少いことをいつただけ

四編、五編に菅江の句は見えない。どうしても本職の狂歌の風が、前句を作つても出てきてよい句が作れないので、三、四年作つてみたが結局あきらめたのかも知れない。然し初代川柳がアノ名声を高めたのに就ては、常に有力な人が周囲についていたからでもあるといえるので、その中の一人にこの朱樂菅江があつたことを忘れられないのである

尙菅江は洒落本の著もあり安永八年出版「大抵御覽」はその代表作でこれにも蜀山人が「四方赤良」として序文を書いている。

# 島津轡紋

と品川情調

## 阿達義雄

### (一) 轡紋と島津の知行・系圖

徳川時代の諸侯中に於て、知行高の最高トリオは、加賀の前田百二万石、薩摩の島津七十七万石、陸奥の伊達六十二万石であつた。之を端的に紋章によつて表現した川柳に、

梅くつわ竹に雀は三幅対 (柳多留四五)

といふのがある。島津の紋はおはら節にも、

「見えた見えたよ松原越しに、丸に十の字のおはら〳〵——帆が見えた」。

とある通り、丸に十文字即ち轡紋である。

轡の御紋御先祖は右馬の頭 (一〇八)

俗説に島津家は右馬頭源頼朝の後裔と言はれ、『天保武鑑』などにまで「島津、本國薩摩、右大將源頼朝卿長男島津豐後守忠久十五代孫修理太夫貴久男」と麗々しく書き出されてゐる。右の句の「右馬の頭」が「くつわ」の緣語であることは勿論である。

その他紋章に關係のない川柳の中にも、

右の大頭は大藩をも意味したものであらうが、川柳では頼朝公を頭でつかちと決めてゐる。

いや〳〵、川柳ばかりではない。近くは夏目漱石の自敍傳的小說『道草』の一〇一節にも、

「でも健ちやんは好いね。御金を取らうとすれば幾何でも取れるんだから。」

「此方とらとは少し頭の寸法が違ふんだ。右大將頼朝公の髑髏と來てゐるんだから。」

とある位である。

琉球の口にはびこる金くつわ (三三)

島津侯は薩摩・大隅・日向だけでなく、琉球國をも兼領してゐたことは周知のことである。金轡は金紋の轡である。

### (二) 薩摩屋敷の位置

と品川情調

鎧とて金のくつわも午の方 (九七)

鎧は武藏鎧を略したもので金の轡紋の島津の屋敷が武藏つまり江戸の午の方角にあることを、鎧・轡・午の緣語細工であらはしたものである。武鑑によれば島津の上屋敷は芝新馬場となつてをり、文政江戸絵図を見ると、江戸の南(午の方角)、海と增上寺に挾まれた中間に位置してゐる。

馬の首あたりに多い轡むし (一一二)

轡虫とは川柳子が轡紋の島津の家來共に與へた綽名である。「馬の首あたり」といふのは、江戸の南方の入口の首ツ玉あたりとか、或は新馬場の先あたりとか、そんな意味ではないかと思ふ。いづれにしても轡紋の句には狂句が多いのであるから、馬を持ち出すことが頻りである。次もその例だが、

乘もせぬ馬に小金の轡虫 (七一)

地図によると薩摩屋敷の附近には、馬場らしい馬場は見当らないから、新馬場といふのは單なる地名であつて、「乘りもせぬ」(或は「乘れ」か)馬とはそれを言ひ、小金は黃金のこと、即ち金紋のことを言つたのではないかと思ふ。

飯盛を夜びで寢かさぬくつわ虫 (一〇七)

飯盛を夜中寢かさぬ轡虫 (一三九)

品川は東海道五十三次の第一の宿場で、行旅の往來の最も頻繁な街路を控へ、宿場名物の飯盛女が多く、深川と共に吉原に対し隱然たる敵地となつてゐた。右句に対して街道だから、馬の往來がはげしくて飯盛女がロクロク眠れない程だと解するは当らない。

成程、

品川は鷄よりつらい馬の声 (四)

まだ夜をこめて馬のなく品川 (三三)

といふ様な句もあることはあるが、『柳多留』百七編が「芝居賣色兩題句合」になつてゐることを考へると、飯盛女郎を夜つぴで寢かさぬ轡虫はどうしても薩摩から嚴めしい轡の金紋先箱の行列について來た大小を腰にさした虫でなければならない。

品川の遊客について、洒落本『婦美車紫鹿子』には、

侍「ハテナ、高輪の内には大分いゝ寺があるて。とかく品川の客は坊主が多いそふだてなア。」

大和屋「ハイなる程。坊主が五分武家方が三分。町人は二分ほかござりませぬ。そこで

高級化粧料容器には勿論！
ヤマギンの……
里硝子
大阪市大淀區長柄
西通一丁目四四
山銀株式會社
電話堀川四四七番

女郎があつかいにくい武ざと。是はしたり。武家と坊主とくろめてゐるから、深川なぞとは違つて、遊びいゝほうでござります。」

とある通り武士・坊主が多く、

品川の客にんべんのあるとなし　（七）

野暮と化物品川に武士と医者　（一六五）

とも詠まれてゐる。人偏のあるのは侍で、ないのは寺である。野暮と化物は箱根からこつちに居ないといふが、品川の武士客は大抵薩摩から來たそれで野暮であり、医者と言つても薬箱持たない抹香くさい医者で、坊主の化者であつた。

野暮な侍だから、飯盛女郎を一晩中ろく〳〵寢かさぬのである。何しろ直ぐ附近に轡紋を打つた轡虫の巣があるのだから「武家方が三分」と云つても、其の大部分が轡虫ではなかつたゞらうか。勿論、この邊には薩摩屋敷以外の大名屋敷もあつたが、何と言つても薩摩の島津は七十七萬石の大藩だから影響が大きからう。

品川で客のたばこの香の高さ　（四七）

抹香も國府も匂ふ品の月　（五八）

右の煙草が薩摩侍を暗示してゐることは言ふまでもない話である。

次は品川関係の句とは限らないが、

轡虫ぐらゐ新造かんませず　（二）

といふのがある。新造は川柳で寢濃いので有名である。それで轡虫のやかましいガチヤ〳〵〳〵位には頓着せず、ぐう〳〵眠る意味にも解されるものゝ、此の「かんませず」が薩摩方言だとすれば本当の轡虫と考へるより、野暮な薩摩武士客と考へた方が面白い樣である。

尙、諸侯などが外出の際、其の行列に裝飾として鞍覆ひを掛けた馬を引き連れたものである。之を詠んだ島津の紋の句として、

春に轡筋目正しき御引き馬　（一六七）

有名な、この丸に十の字の轡紋すら知らない者が江戸に居つたといふことを、

江戸廣し轡の御紋どなたさま　（一二四四）

と詠んだ天保三年七月二十九日開の句もある。

〔註〕現在薩摩地方で「拘はぬ」ことを「かんまん」と言つてゐる由、それでは「かんませず」は、この「かんまん」を少し緩つて皮肉つたものではあるまいか。

## 「川柳まつり」事件

に端を発して、目下、大阪柳界の淨化運動が展開されている。一方番傘派では揉み消運動にヤツキとなり、臭い物に蓋主義をとつてゐるが詳細は次号に、

（校正室にて一記者）

## ―紹介―

▼田中辰二氏（熊本市）は熊本日日新聞に「川柳の味」を上中下三回連載された。「番傘」や「川柳雜誌」の句風にまで論及されてゐる。本社に切抜があるから一読されたい。▼愛知、岐阜、三重三縣の「川柳作家名簿」が名古屋番傘の佐々木鳳石氏編で刊行された。（非賣品）以上三縣に限らず各地から斯うしたものの出版を切望する。▼西日本新聞の九月五日文化欄で川柳家（速水眞珠洞・松崎笑三朗）と俳人（吉岡禪寺洞・河野靜雲）が「最短詩型の動き」に就て語つてゐる▼新愛媛新聞に「新川柳と文化」と云ふ社説が掲げられてゐる。川柳が新聞の社説に扱はれたのは始めであろう。▼川柳画報「まんが文化」第一号が小倉市鍛冶町五丁目天地堂出版社から刊行、三五円。▼鈴木可香氏が「全國川柳家歳年表」を刊行された。大した労力は認めるが、肝心な人が落ちてゐたり、川柳家でない人が川柳家になつてゐたり、川柳家が川柳家外著名作家になつてゐたりする。出されるまでに一寸見せて貰へば、いくら忙しくても訂正してあげたのにと思ふと惜しい。これを一つの文獻として扱う人たちは特に留意されたい。▼川柳句集「冬の河」が大阪市北区梅田町阪神電鉄内おもちや箱川柳社から発行された謄写版六六頁非賣品水谷鮎美氏編。

## 柳人交歡

川柳不朽洞会員
川雜久賀支部幹事
**岡村路三**
山口縣大島郡久賀町
電話久賀局三番
大阪市阿倍野区天王寺町三五〇九
電話天王寺二〇六二番

## 同居

高田抱逸選

（課題吟）

お愛想が下手な同居の國訛り　松雄
同居もう勘弁ならぬことを聞き　日濤子
妙齢の同居へ妻は氣を廻し　笑泉
悲劇尙つゞく同居の記事を読む　きはち
梯子段夫婦喧嘩へ降り切れず　七面山
時々は派手な御客も來る同居　甦光
七人の子供かかえて同居に來　錦風
あるだけの間を貸し後家のそれで生き　爲雄
とかくこの世は住みにくい二階借　巷歩
同居人子供の太鼓を眼で叱り　元馬
同居して主の趣味に逆らはず　路三
父さんの還りを待つてゐる同居　葉光
しばらくと住んだ同居が二年たち　滋路
天井へ同居の呼吸を吐いてゐる　鮎美
同居する一人は笛を吹く男　柳堂
水道の音も氣にしてゐる同居　潮花
合住居遠慮しあつて笑顔なり　國子
寄附金に同居は少し額を下げ　梅風
巡査ですかと同居さす氣にもなり　奇朗
同居の子又又下駄を変えて出る　一穂
家主から押しつけられてゐる同居　清潮
同居して心の枠が抜けきらず　米市
職がある迄とは同居虫がよい　喜由
引揚者同志同居の家を建て　草々
强盜の時節同居の居る强さ　正則
同居の女そのまま署へ引かれ　茶仙
同居者の派手な暮しへ不審がり　山崎
同居者の共同作業で麥が獲れ　平人
同居してみれば世間がよくわかり　花代子
人間の悲しさ鍬が要り　柳堂
同居ある夜子供をひしと抱いて泣く　弓削平
同居人建てるつもりの鑑を買い　水滴
間借して今日も我が家の夢を見る　美水
五客
・出産へ同居もホツト息を呑み　笑泉
・同居して留守居の要らぬ共稼ぎ　弘三
・同居只默つて家の建つを待ち　巷歩
同・ダンサーへ二階を借して疑つかれず　一球
同・恋愛に勝つて同居へ雨が洩り　龜水
人・同居して勝手の違ふ陽を拜み　鮎美
地・本堂を洋裁に借し寺に春　北路
天・同居する弱みは金のない弱み　岡王
軸・ひかへめの同居へ民主の陽があたり

# 柳誌の反省とその將來

東野大八

按ずると現在の川柳の行き方は俳句、短歌の在り様にくらべ、対外的に求訴して行く自主性がないというのは柳誌依存主義で数多の柳誌を併読する以外に柳味の実質なり傾向が判然としない欠点がある。川柳人もれなく全國各地から出ている柳誌に眼を通すのが資格ある柳人の素養となるが、その煩しさと経済的な面で好みの柳誌にとりつく一方的な世界しか得られない、随つて柳界に眼の明るい人は無暗と廣いが、一誌同人を手堅く固守している人はその柳誌以外の行き方にくらくて作句もいきおい手詰りな結果を齎す、両者のこのひらきが甚しいために、自づと柳人の資格が区別され、前者は玄人じみ、後者は依然として無名新人のまゝ歳月を費すことになる。得られるところのものがこの様に不均衡な世界には自づと発展に制約を生じ、その要素はみづから封建的な遇境を作り出す。川柳が世に出ない大きなヒツカヽリは一重にこゝにある様だ。私がかねてから提唱する権威ある綜合柳誌の強力な出現は、実にこの短所を補い欠点を排除するところにある。この綜合柳誌の問題が出たから廿一年十一月号「むつみ」に出した私の「柳界振興の一方策」と題する小文の一部を再録してみよう。

「由來同人誌なるものは同好の同志相集つて娯しむ回覧の用途から始るものであつて、純粋なる作品意欲の現れと見做すことが出來るこの純粋度から更に前進して廣く観賞者を世に求むるもの、その実力と抱負はやがて斯界を経倫する迄に権威化されたときその同人誌は世人の支持とともに最高の水準に達する、端的に約すれば同人誌の方図はかくの如きものであつて常にその素地は純正無私なる川柳愛への発露たることを本質とする。然るにこれが俳他独善的同人集の主観に毒せられ一吟社一作家の柳界賢名の具に供せられるとき如何なる態の結果を招來するかそれは語らずとも明白であらう。」

味しない同人のかりあつめや、金銭の負担を持つから低俗な作品も眼をつぶつてのせねばならないという、お義理と方便主義による柳誌はいきおい作句水準が低調となるのは当然である。しかし一方小柳誌の中には同人誌本來の使命に立ち良心と責任ある選句をとつている主宰者もあることは忘れてはならない。しかしこの世界は現実と夢の相剋が強く、人の和という経営上の中心にヒビが生じ易い。能力があつて熱心で金があつて発行に理解ある同人を多くにぎれば問題はないのだが、さうは問屋が卸さない、かへつて有能な同人ほど主宰者に対し反撥する傾向が強いのだから話は厄介である。小柳誌経営にとつてこの様に矛盾した両面があるから、よほどの才覚

現在柳誌の一部には、この様な御手盛柳誌が見受けられる、私の手許に届けられる二、三の小柳誌は昨日はじめて今日から出しました」といつた稚拙でいゝ氣なものが、顔の寫りさうな極上の用紙を使用している。いづれも主宰とか主幹とか銘うつて俗にいう「心臓の強さ」に呆れざるを得ない。吟と実力がなければこの企劃も成立たづ、行き当りばつたり式の思いつきや考へ方では一時的なものならば別だが永続性はない。心なき人の眼の底からも無限の惜別を浴びて陶汰され行く小柳誌の運命は、常に現実と夢の行手に、己れの姿を見極め得ないところに胚胎する柳誌の後姿とともに有爲な柳人も

## 不朽洞句帖

麻生路郎

大和にて

牛小屋をそつと覗けば今日は留守
going my way 牛は田圃ゆく
春雨だなどとは云はず牛は行く
村平和牛が親子で歩いてゐ
この村で牛持つ家の數に入り
思ひ出は牛と子供がおないどし
牛老ひて家族のやうにいたはられ

# 動★靜

▼本社八月の句会は一日午後一時から一運寺で開催▼浜寺支部と阿倍野支部合同浜寺納涼川柳大会が南海電鉄及大毎海水浴場の後援で八月十七日午後六時から開催され驟雨一過の中に句三昧に浸り盛会だつた▼逓信病院川柳会は十八日午後二時から開催▼扶桑金属川柳会は十九日午後四時から開催された▼関西配電本社の先陣会では三十一日午後四時から開会された、以上何れも路郎主幹出席▼本社の柳翁忌が九月五日午後一時から一運寺で開催、散会後不朽洞会が開かれ、「川柳まつり」事件に関し不朽洞会の態度が決議された▼浜寺支部は九月十一日午後六時から開催「岡田三面子に就て」路郎主幹の柳話があつた。なほ当夜は三面子博士の二女の方が出席された▼小女郎吟社主催の近縣川柳大会（新居浜市）が九月十二日午前十時から養楼で開催盛会だつた。▼逓信病院川柳会が十五日午后二時から開催▼扶桑金属川柳会が十六日午後四時から開催のところ高潮警戒のため流会となつた▼関西配電の先陣会の秋季大会が天六菊月寮で廿五日午後一時から開催路郎主幹と緑雨、鮎美の両氏出席▼ドンの夕川柳会が午後六時から開催され不朽洞会員其他が出席▼大阪市交通局（緑雨）大阪鉄道局（水客）・南海電鉄（貴山）・京阪神急行（紫香）・阪神電鉄（鮎美）・の二局三社聯合川柳大会が九月十八日午後一時から阪神電鉄が世話役で武庫川の春風荘で開催、路郎主幹出席カツコ内は代表選者▼川雑阿倍野支部は九月十八日夕六時から晴明通の特殊紙器工業で開催、路郎主幹出席▼西本三笑氏（金沢市）八月十一日庄方よし氏が來沢、支部で小集を開き、散会後、二十年振りの万よし氏と夜を徹して語つたとのこと▼永江登詩夫氏（西宮市）は鈍昧と改号された▼後藤青兒氏が七月十五日に長逝された（川雑島之内支部同人）氏は資性豪放▼闘病生活を続けてゐられた川柳山脈社同人都筑晴一郎氏（静岡市）が八月十二日に永眠された。▼千石莊川柳会（只塚市）の同人中井喜平氏は七月末に、椿童子氏は八月十四日に他界された謹んで悼む▼篠山籌彦氏（大阪）は八月八日、長女茂美さんを儲けられた。


品質優良

ペン先
針ピン
セムクリツプ

立川ペン先製作所

上野市

再び柳壇に還へらなかつた例を思へば、柳誌も滅多に手塩にはかけられないであらう。

私の綜合柳誌案の提唱は、この様な明暗二様の姿を思い現柳界の在り方に立つてに外ならない。私の綜合誌案はどの様なものか、それを再び「むつみ」の小文から引いてみよう。

「その構成を述べるとまづ会員は全國有爲の柳人を洩れなく抱擁し斯界の先覺有識者を会員選出の形とし選吟指導ならびに柳質啓蒙に関するあらゆる一切の参與にあづかつて貰う。その発表誌は適宜な方法において発行する、編輯者は柳人中より選任するも中正無色を期するため、原則として川柳に理解ある文化人に担当せしめる。内容は全國柳界の動向から柳論主張を戰はせるほか現存諸新聞が持つ文化のモラルを集中採取して全國のあらゆる川柳に関する記事卓論を一目瞭然たらしめる、これに対する地方吟社の存在は支部の形式をとり、柳誌の(吟社の親睦句作機関とし同人誌本來の性格に則る)存置するのは自由である(中略)かくすれば川柳人のみの柳誌たる弊は一新紀元的な前進を劃することになる。これが実質的に実現すれば全國唯一最高の權威ある「川柳作品賞」を制定し、その委員によつて過去現在の名作家、名句、柳界功勞者を顯彰するという仕組である。」

甚だ大まかな腹案で恐縮だがこの骨子に基けばある程度の内づけが行はれてくると思う、柳人と一般人の差別のない川柳ジャーナリズムの勃興はこの様に權威化された方図以外にはその道はないと考へる。勢力ある一吟社乃至柳人がこの作句の行き方のみに抱泥し柳界全般的なものを壅断するなどは頭から再考の余地がある。先輩、中堅、新鋭各層の作句能力を総覽し一定水準を樹てその在り方の中から川柳の未來はどうあるべきかと眞劍に味到しない限り、川柳は豊醇百糅文學としての條件を喪失してしまう。要は各柳人指導者の大局的な判断と理解が協力の形で大きく結び合はれば川柳の足ぶみは今後も意味なく続くだらう。採算度外視の趣味的柳誌の反省がこの期において憤起一番行はれなければならないときだと思う。

(三月・八・三〇)

夫 岩崎柳路(武夫、儀病臥中の処十月三日午前一時死去致しました生前の御厚誼を謝し御通知申上げます

昭和廿三年十月四日

兵庫縣伊丹市下河原一六六

岩崎松代

本会理事岩崎柳路氏十月三日永眠致されました茲に謹んで御通知申上げます

川柳不朽洞会

## 川柳人に告ぐ

▼大阪市主催・番傘川柳社協賛「川柳まつり」の内容が人の褌で相撲を取らうとした「番傘」の狡獪政策であることを、柳想社の清水良祐、中岡三吉両氏の義憤によつて、はしなくも曝露された▼市当局は事の意外にあきれ、直ちに「川柳まつり」を取り消したので「番傘」幹部は色を失ひ、目下その糊塗と彌縫に大童である。▼この「川柳まつり」事件に依て大阪柳界は市当局の信用を失墜すると共に、番傘社と各柳社との協調が破れ大阪柳界の空氣が俄然悪化したことは云ふまでもないが、その全責任は番傘社が負はなければならない。▼しかしながら番傘社では更に反省の色なく、その糊塗策として「川柳まつり」の假面を脱ぎ、番傘川柳社創立四十周年記念全國川柳大会開催と看板を塗替えたのはよいが、出場講師選者として南北・路郎の名を無断で発表してゐる。何処までも番傘式狡獪政策の連続に大阪の柳人達を唖然たらしめてゐる。▼茲に於て私達は全國川柳家に番傘の正体を正しく認識させると同時に番傘自体に反省を促すため、大阪柳界の將來を憂うる人達によつて今回「番傘批判座談会」(仮称)を行うこととなつた。▼発表は「川柳雜誌」の誌面を借りる事にした▼各地柳友に告ぐ、——番傘主催の大会へ折角お出掛け下さつても、まことに氣まづいところをお目にかける事となるので、此の際、前以て失礼をお詫び申上げておく。

昭和廿三年九月　日

大阪柳界革新委員会

粛清運動が予想されるので各社委員の名は今暫く秘しておく

## 不朽洞會から

▼八月一日午前十時から二運寺で不朽洞会を開いた。▼渓田久米雄氏は全日本観光連盟主催の観光夏季大会出席のため八月一日日光へ出張「結構というを見に行く靴をはき」の句信を寄せられた▼市場浪食子氏(大阪)は八月十三日、生野郵便局で「川柳と近代的笑ひ」を講演された▼宮田不二氏(旭川)の母堂が七月三十八日に永眠された謹んで悼む▼西尾栞氏は八月下旬に家族同伴で椿温泉から白渓温泉へ遊ばれたとのこと▼吉田斜水氏は八月十八日に長男を儲けられた▼野本呑水氏は七月廿一日に四女マリ子さんを挙げられた▼水谷竹莊氏は八月廿七日の大阪逓信病院職員納涼演芸会で原作菊地寛、「恋愛病患者」(二幕)の佐々木貞一と、喜劇「愛楽かつら」の高石カツ枝を熱演されたとのこと▼小川静観堂氏は伊丹市廣徳寺一〇〇へ移轉せられた▼不朽洞会賛助京大教授文学博士新原退蔵氏が八月三十日午後三時尿毒症で京都市上京区大將軍西町の自邸で永眠された痛惜に堪えない。享年五十才。俳句研究の權威であるが、今秋から大学で川柳に就て講義をされることになつてゐただけに柳界の損失も大きい。▼尼崎之助氏(出雲市)が九月上旬、市長に随行して来阪されたが郵便物の逕配で会へなかつた▼岡村路三氏(山口縣)は川柳久賀支部の句報を「大島」と題し、その十二号を刊行、その堅実さを見せられた▼浅田一博士(東京都)は昨年還暦を迎えられ門下からオールウエーブラジオセットと牛皮の手カバンとをお祝に贈られたとのこと芽出度い限りである。▼武部香林氏夫妻(大阪)は九月二日墓参のため郷里岡山へ帰省された。氏の句信「墓参り汽車の値上げも言上す」▼路郎主幹は九月八日午後三時から京阪神電鉄土木課の喜楽楽会で講演された。

### 新會員紹介

九月

山東路城氏(大阪市)路三氏紹介

橋詰東雀氏(大阪市)正妄夢氏紹介

稲瓜平氏(大阪府)正路郎主幹紹介

篠山籌彦氏(大阪市)正復員復活

十月

永田里十九氏(布施市)維健康快復により復活

胃腸通多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモンゲン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

# 花地物語

**投稿清規**

▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先本社

▼七月十一日開催（前号一日開催は誤）大会の選句中、兼題席題の軸吟及三才と出席者を既報。本号へは兼題の入選句を發表することにした。

特別兼題「還　暦」扉生路郎選

還暦を梅田のゴミと共に居る　一球
還暦の父小使で終る氣か　鳩花
やりぬいた意氣を還暦ねぎらはれ　八歩
政界に立ち還暦の宴も派手　默紅
還暦の酒も飲まない人と知り　文柳
還暦の母に歌舞伎のかぶりつき　梅子
還暦の今日は自画像書く氣なり　さん太
還暦へ先代様と杖嬢ひ　啄舟
還暦をつい労つて叱られる　伊知呂
還暦の卷かればならぬ卷脚絆　靜觀堂
還暦の父は白髮を染めぬ主義　喜代志
還暦と見えぬ若さの流行語　白星
還暦のまだ植林をやると言う　聽松
還暦の言葉妻にも改まり　祝平
還暦を祝へば酒量淋しがり　正穂
還暦へ無理しなほんなやと云ふてくれ　扨智
孫抱けば還暦らしい顏になり　潮花
還暦で嫁を探がしてゐる話　清潮
還暦へまだ〳〵ゐり羽なぞいちゃ　花代子
まだまだ喧嘩もするといふ還暦　鼓扇
還暦の若さダンス誘はれて　奇朗
還暦へまだ衰へぬ筆をもち　定美
還暦の今日を限りに愁を捨て　丁路
還暦の夕べ酒友絵具皿　覚史
還暦へいまだ頑固が衰へず　夕鐘
疎開地で本卦がへりの藁草履　勢三
還暦へ人が囲んでくれる德　帆二
還暦の脚ゼネストに負けてゐず　三星子
還暦の口だけひけはとらぬ父　簑笠
還暦といふ貫祿は頬が落ち　祭人
初対面たり還暦の眼をみつめ　正夫
柳道の燈火こゝに六十一　香林
還暦へ恋諦めた顏でなし　七面山
還暦の別座にされて納らず　えいを
還暦に人をゆるして茶がうまし　東洋樹
還暦にみんな揃つた宵疊　綠雨
還暦に連れ添う妻を振り返り　呂香
本卦がえりまだ棚ぐらい吊りやする　竹二
還暦を鳥打帽の似合う人　有、町
還暦の目で見た日本近代史　幻二
藝術に歳なし若い六十一　伍健
還暦と聞いてネクタイ見直され　孝三郎
六十一まだ生き氣の顏の艶　文蝶
還暦の人とは見えぬ半パンツ　水車
還暦のお祝弟子の弟子もくる　日潤子
還暦へまだ貧乏がつきまとひ　庸司
還暦へ本人はちと淋しそう　博也
九星にすこし不服もある本卦　茂
還暦かせめてひげでも剃つたらか　野介
還暦へこうも身分が違ふもの　岡王
還暦へ職があり還暦の祝賀会　葉光
還暦の東京へ行く事業慾　素生
還暦へけふからは子供に還るぞ　金矢
還暦でも愛煙家には変りなく　亞鉢
この次の古稀までつゞく情熱さ　竹莊
還暦を訪へば徹夜の筆を擱き　斜水
還暦に次の祝のプランも出　大甲朝
六一の祝町議に出馬する　北路
還暦の精力絶凄目出度けれ　錦風
先生の思ひ出明治からつづき　信夫
還暦はまだスネ噛ちる子を案じ　まさを
あの若さもう還暦か還暦か　乙平
立志傳実を結んだは還暦後　文庫
落ちぶれたまま還暦の年迎へ　一郎
還暦のなほ〳〵忙しくなつた　義風
今更に我還暦にうろたえる　元馬
子に還る齡配給がしやんと減り　汐風
還暦へ世間の用が多すぎる　柳次
還暦へ母生甲斐を繰り返し　茶佛
還暦を祝ふロイド眼鏡に曇りなき　孤呂二
還暦は顏で仕事を片づける　半休
還暦の生きてやりたい子の多し　露斗
還暦をさわがれそうかなと思ひ　柳重
還暦にもう若且那とも言へず　種美

当日未選句中より追加

還暦だ廻れ右前へ第一歩　自由朗
還暦が京都で暮らしたいと云う　雲雀
もう飲めん〳〵と還暦綻てしまひ　千舟
還暦の他力本願身につけて　万よし
還暦の思へば長い夢のあと　直三洞
還暦も吾一人のものでなし　美水
還暦の社長に二号一人ふえ　醉月
還暦の浴衣に軽き顏となり　塊人
還暦の座敷みどりの風が吹き　不二也
年は還暦でも英語やりダンスやり　松夢
還暦の眼へ美しい妓が通り　久米雄
カストリでよし還暦の肌の色　三窓
還暦の祝十八番も出し盡し　凡々
還暦へ昔馴染の顏が寄り　夢裡
還暦の鼻息つよいことを云ひ　豆秋
還暦返上まだ働ける有難さ　白柳子
還暦の夫唱婦随を庭で撮り　紫陽
還暦へ白を握らす恭客くる　萬樂
還暦へ何か残して死ぬ覚悟　稔一
還暦の白髮染めようともしない　水客
還暦の恩師へ今日の空青し　小楼
かどが取れたらもう還暦さいふ夫　圭井堂
還暦に惜しむ競馬へ注いだ金　僖二
還暦はだん〳〵ゴールに近くなり　角堂
還暦へ恋の憶ひ出語れとは　小松園
還暦を囲む門下も老けてゐる　紫香
還暦は嬉し清貧も快し　生々庵
緒についた事業還暦何んのその　良之祐

## 川柳大會句報

川柳不朽洞會主催
路郎先生還暦祝賀

其の二

大會に於る路郎師

濱田久米雄氏撮影

六十一お茶のうまさが分りかけ　省作
還暦は詩魂炎と燃える人　砂人
女房に押されて六十の坂を越す　鉄洲
還暦はほくろの毛さへ目出度がり　句沙彌
後添の若さ還暦とは見えず　酒仙
還暦を他人にしてよく動き　不二
當人は眠たくなつた賀の祝　おさむ
父の還暦ただ飲むばかり食ふばかり　迷親子
還暦へ自慢の息子が一人ゐる　良子
還暦の父に物價がうそのやう　草々
還暦になつて少し折れた父　三吉
節操を曲げず還暦祝はれる　三次
還暦へ息子がビール抜いた音　龜歩
還暦の肩もときゞ〳〵落を負ひ　康彦
釣りの趣味句の趣味本封菊の趣味　靜丸
還暦もライター持つて敗けない氣　月南
多士済々師の還暦の祝辞聞く　小壺
これ迄は夢これからか〳〵　一甫
還暦に本腰すへた氣力あり　櫻ン坊
すいもからいもかみわけて今六十一　良夫
かんれきの越し山坂をフト思ひ　貴志子
短冊へ六十一の筆が活き　鮎美
還暦と見えぬ恩師も働く身　のぶを
還暦の名誉教授で光つて居　史葉
還暦の師にまだしいる事があり　沒食子

還暦の第二夫人に子が生れ　思月
還暦に女房がゐたらなと思ひ　無鬼

## 生命（いのち）　奥村丹路選

生命などいらぬ壷寝の姿なり　栞万的
若き日のいのちへ海の風まとも　万樂
運轉手に委せた生命醉ふてゐる　思月
母子寮に母子の生命いたわられ　竹々朗
賣つちまへ天涯孤独の生命なら　沒食子
一つしかないのに生命賣る男　伍健
生命とはさてもろいとも強いとも　三星子
落零れて無駄な生命を陽に愧ぢる　香林
酒煙草女といのち軽るんずる　花代子
生命だけあればと夫婦仲が良し　梨雨江
わが生命てのひらを見るひまもなく　春巣
生命などいらない恋がして見たし　水府
生命ある野の草踏んで金を持ち　浦太郎
この生命涯なき夜の波に立ち　一郎
病ひと壽命別とは淋しきお世辞なり　祭人
生命まで掛けたは古い恋にされ　伍健
絵馬堂に生命拾ひの額となり　鴛藏
一人つ子生命もいらぬ恋をする　葉光
原稿紙不治の生命を惜しみつゝ　庸司
久闊の君生きてたか生きてたか　小柳子
いつまでも生命がはしい孫を抱き　梅里
生命より金が大事な金を借り　周太郎
行倒れ命と腕に彫つてある　好郎
借る時は生命の親と拜んどき　自由朗
くろ土に祖先の生命脈を打ち　北路
いのちだけ残り廃墟に立ち上る　大甲帽
とりとめた生命窓が白みかけ　豆秋
どんぐりも食べたり生命永らへて　鮎美
ガード下死線を越へた瞳がすゞし　生々庵
私の夢が生命を吸ふて伸びるのよ　鉄洲
君の生命だが御自由とはいゝかねる　岡王
その日その日の時計の針に似た生命　亜仁
子の生命呑んで野井戸に蓋が出來　白柳子
長命の相星空へ手を洗ひ（津山）　汐風
墮ちてゆく生命いとく眉を描く　元馬
生命知らず時代はいつも從つてゆく　ひろみ
油蟬薄命の身を啼き疲れ　砂人
長命の血筋の中にわが痩軀　東洋樹
水かけてやつてうなぎ屋ぢきに割き　錦風
鴻毛の軽き命を持ちかへり　密彦
いのちあり今還り來ぬ祖國の灯　默紅
折鶴へもう危機が去る子の生命　竹二
松籟にいのちめでたき夫婦住む　素生
松のいのちのふるさへ久し振り　文蝶
うたがはれながら生命も捧げる氣　柳次
リンゲルへ泣かぬ子供となりにけり　東洋樹
百獣の王の命が檻につき

## 兼題「珍客」　須崎豆秋選

これは〳〵の珍客に米がなし　葉平
珍客であろうが蚤は知らぬこと　勢三
珍客は電報よりも先につき　静一路
珍客へ子の頭数見てもらひ　夕鐘
珍客ともう友達になつてる子　三吉
珍客にサル又一つで飛んで出る　野介
珍客は麥飯たいたとこへ來た　白柳子
珍客がビンと感じた低氣圧　金矢
珍客を後で老婆あおいで居　瓜平
珍客だ〳〵とて先に醉ひ　山兒
珍客へこれが私の家内です　蘇雨子
珍客を中に一家が飯となり　元馬
生きてたんかと珍客むかへられ　九一
珍客へ裸になれと裸で居　ひろみ
珍客々々と早や碁盤出し　半茶
珍客は噂の通り慌て者　水車
珍客に交る交るに子が覗き　孝三郎
珍客へ妻も話題の中にとけ　東洋樹
珍客へ子はつまらなく座らされ　茂穂
珍客に裏の畠も見てもらい（津山）　白柳子
三日目は珍客でなし薪を割り　杭心坊
珍客にトンボ返りをして見せる　宵丹子
珍客へ裏のトマトー盛り上げる　万よし
珍客はシベリヤからの頼をみせ　塊人
珍客に仲のよいとこ見てもらひ　千舟
珍客の囃上手へ午前二時　水月
珍客へ再縁少しもやべりすぎ　蝶二
珍客へ御馳走はただ海近し　萬樂
珍客も興にのつたか佐渡おけさ　柳太郎
珍客もどうやら闇屋やつて居り　斜水
珍客へきうりやなすでおそれ入り　露斗
珍客はどうやら金の無心なり　好郎
追ふてゐる様に珍客通される　祭人
珍客へ庭の景色を開け放ち　翠光
米持参とは珍客の水くさし　八歩
珍客と橋を渡つた久しぶり　夕歩
珍客へまだ起きてゐる勝手元　有町
珍客の亀の畫寝を驚かせ　文久
珍客は宿に二号が待つ様子　砂人
珍客の手拭白く朝となり　水府
珍客えこれが妻です子供です　伍健
珍客の麻のズボンがまるくなり　水府

## 兼題「大阪」　市場沒食子選

放逸に大阪弁をなつかしみ　貴志子
心斎橋近頃とんと行きません　康夫
そうだつかとはあんたも大阪か　角堂
大阪を忘れてしもた疎開の子　風路
疎開したまゝ大阪へ呼べぬ妻　千舟
井池で生れ二つ井戸で育ち　梅里
大阪で生れ大阪で死ぬ氣なり　國太郎
大阪の土産と判る梅の紋　木声
大阪でもうけたそうな家が建ち　久米雄
喰へなくも矢つ張り大阪養まれ　月南
大阪で生れ目焦けのミスボリス　鮎美
大阪で賣ればと闇の値踏みする　柳太郎
平和來る大阪城のいゝ委　覚史
なんぼ焼けても川と煙の大阪さ　葉栄子
敷石が昔のまゝの法善寺　好郎
大阪の土になる氣で儲けてゐ　竹莊
大阪の魅力歩けば儲けごと　喜由
大阪が大好きだつた綴り方　勢三
出世もせず大阪の長屋に居　緑雨
大阪でんれんれえちゃん多弁なり　方正
大阪へ來て学校出喪まれ　東洋樹
大阪の街麥がとれ芋がとれ　文蝶
大阪で儲けたといふ故郷の墓　亜鈍
豪勢にやつた大阪忘れかれ　良子
疎開先でも御寮さん〳〵　鉄洲
大阪で一稼ぎした女なり　おさむ
又もとの大阪になる靴の音　鳳石
大阪で育ちこせ〳〵した男　岡王
大阪のエロを眞面目に聞いてゐた　夕鐘
大阪の市電から見た豆の花　白柳子
大阪でうまいが高いものを食ひ　素生
橋筋を心得顔のサングラス　和枝
大阪へわざ〳〵金をすられに來　驛松
千日ですられてスリにちつた訳け　孝三郎
大阪城だけに名勝の名残とめ　竹青
大阪と言へば闇値を尋ねられ　のぶを
大阪へみんな儲ける顔で降り　汐風
賣喰ひをし乍らも大阪をはなれない　美奈子
母親の夢は船場でまだ栄え　水滴
土産屋で大阪弁の子が値切り　梅子
復興祭大阪と云ふ煙り上げ　史葉
二三が八で通る大阪はいゝところ　生々庵
追剝が出る大阪と思われず　茶佛
五郎劇大阪弁のイゝ皮肉　伍健
別嬪の御寮はんが倉にすみ　蝸牛
焼のこり元の大阪見つけたり　白柳子
文樂がある大阪の隠居さん　祝平
大阪に別な味あり文樂座　伍健
煙の都風呂屋の煙まぢるなり　砂人
大阪の相場に相場ひきづられ　文庫
金のカサ大阪らしい数を言ひ　凡々
大阪に残つて下手な畑する　萬樂
奉公をした大阪へまいもどり　有町
引揚げて來た大阪でパンを焼き　雲雀
大阪で肝が潰れる値に出合ひ　丁路
汁ばかりでも大阪にかむりつき　竹二
勞組の要求大阪らしい額　斜水
大阪で眼鏡のずれた父迎ふ　風來子
ほたるでも出そうな船場島の内　豆秋

## 兼題「眼鏡」　清水白柳子選

老眼鏡忘れ電車で目をつむり　瓜平
梅玉の鏡を見つけた貸眼鏡　丹路
三十四度眼鏡外せば眼がいたし　淡舟
師の眼鏡今日の紫煙につゝまれて　博也
眼鏡をはずす散髪の番　大甲帽
伊達眼鏡トイレットからかけて出る　北路
德望を眼鏡に見せて眉太し　三星子
凝視する眼鏡名工動かない　勢三
眼鏡曇らせて苦難の過去にふれ　祝平
依然たる眼鏡依然たる生活　塊人

新聞と言へば眼鏡を添へる嫁　梅子
肉体の門を見にゆく夜の眼鏡　八歩
兩眼を國に捧げた色眼鏡　美奈子
彼眼鏡とる夏疲せがよく目立ち　幻二
大臣席眼鏡かけたり外したり　水車
PTA老眼鏡がよく光り　砂人
眼鏡越し睨まれて押す出勤簿　えいを
外出の妻は眼鏡をしのばせて　ひさみ
湯の中でかけてる眼鏡度をきかれ　句沙彌
このピンチ切り抜くめがね試してゐる　おさむ
横顔が伊井にそつくりだてめがね　潤山
黒眼鏡案外素直な返事する　蘇雨子
答弁もしどろもどろに眼鏡ごし　茶佛
見えぬと言へばそれまでの眼がれ　喜由
あらそへぬもの君も老眼鏡なのか　夕鐘
興奮の覚めぬ眼鏡は本の上　柳次
眼鏡かけてると姑になつてくる　水府
眼鏡ふく策士静かな顔である　東洋樹
とげたて丶母の眼鏡は背のびする　おさむ
言ふ事の鋭く眼鏡時に拭き　素生
落ちそうな眼鏡で代書念を押し　省作
増税の噂眼鏡の曇りなく　孤呂二
他人さまはくち遅がよい眼鏡ふき　呂香
嬉しさは君の眼鏡の曇らぬ目　花代子
集團見合眼鏡同士の縁となり　一球
パーマネントへ眼鏡の弦が引つかゝり　奇朗
停電へ眼鏡の重みふと感じ　默紅
蝙々の眼鏡なつかし天王寺　柳次
色眼鏡とればやみ屋も可愛もの　月南
似顔絵のロッパ眼鏡で出來上り　雲雀
大震禍眼鏡どころでなかりけり　義風
眼鏡かけてかへる踊子世帯じみ　竹二
父の眼鏡で間に合ふ母の出納簿　砂人

## 兼題「ボート」　水谷鮎美選

戎橋ボートの夜景見て帰り　松夢
オール立てば岸の校歌が馨くなり　蝶二
ボート今人を抜ける速さなり　蘇雨子
貸ボート恋の二人へいゝお世辞　伍健
女同志乗つたボートはいちめられ　晴峯
おい乗せてやろかと恋のないボート　日潤子
母の見て居るボート矢の如し　思月
面白くボートがゆれる裸の子　梅子
川風に立てばボートの灯が涼し　潮花
北浜のかへりボートに風を入れ　さん太
衝突をしたのがボート楽しそう　文柳
よきパゝとして日曝の貸ボート　唐司
ボートから只壮麗な取引所　万よし
古戦場今はボートの遊園地　坪美
櫻ブギウギボートの搖れてゐる　凡々
貸ボート上れば冷へて居る　三司
ボート搖れ父の泳げぬことを知り　風來子
ボートから見る大阪の街の裏　三吉
憶れてゐて豆の出るほど漕がされる　不二
さゝやきのボート流れのまゝにゆく　翠光
倖なボートは月へ漕で出る　勢三
ボートから月へとどけとハーモニカ　小松園
恋人のボートへ朝を泳ぎ切る　かれよ
ボートからライター深く取り落し　八角子
橋二つくぐつてボート引返し　素生
一人貸るボート氣儘に漕ぎ廻り　幻二
プローチが夕陽に光る貸ボート　三窓
ネム
合歓咲いてボートの二人美しき　白柳子
仲のよいボート柳が垂れ下り　不二也
貸ボート別の世界がのんでゐる　雲雀
ボートからすくふ楽しい池の水　僖二
夕方のボートあいつ等靴磨　梨雨江
貸ボート女の顔をまともに見　久米雄
つぎ〳〵にボートが戻る風となり　宏方
一人こぐボートへ晝の月淡はし　庸司
轉覆をさせてボートに飽いてる兒　ひろみ
革鞄ボートの人を見て涼み　有町
ボートこぐ男らしさが陽をはじき　義風
打ち明けるチャンスボートの一時間　祝平
大びらで共学の男女ボート漕ぎ　孫揺
ボートでは地震のゆつたのも知らず　豆秋
デモ行進に興味を持たず貸ボート　砂人
ボートから上る二人にすみれ咲く　孝三郎
ボート屋のおつさん娘の方を抱き　水車
ボートも暮れて燒跡も暮れて來る　水府
還りたい町の暮色にボート見る　東洋樹
貸ボートきつちり二人でいよ廣さ　奇朗

## 兼題「鯛」　浜田久米雄選

戒檪鯛ばかり釣るものにされ　三窓
にらみ鯛お年寄から箸がつき　皷扇
還暦の鯛は網元から屆き　思月
運のよい鯛花嫁の膳の上　萬樂
妻の瞳に鯛の魅力はなかりけり　風來子
誕生日小さな鯛にはげまされ　康彦
氣乘りせぬ男いきなり鯛を釣り　竹々朗
としよりはうれしうて泣く今日の鯛　竹二
魚島の鯛ははなしに聞くばかり　豆秋
裏返しして母さんへ廻る鯛　勢三
裏口をまわつて鯛は座敷に出　野介
明日の鯛身内が揃ふ指を折り　素生
れんこ鯛今日は二階が嫁を取り　文蝶
花嫁の器量が鯛の眼にうつり　潮花
叱られはせぬかと思ふ鯛を買ひ　櫻ン坊
休業の屋根看板に鯛が跳ね　水府
鯛の値を逃げる姿で聞いて見る　弓削平

## 兼題「内助」　橋本綠雨選

よくやつてくれたと妻の手をにぎり　周太郎
貯金までして驚ろかす妻の腕　豆秋
株のかも言わず内助の膳の上　竹二
表彰のカメラへ内助かしこまり　竹藏
これほどの内助となりの灯をともし　文久
默々と働いたまゝ妻は逝き　路三
自序傳へまだ〳〵遠いミシン踏む　帆二
インフレの波へ新妻ためらわず　若葉
死んでから内助の功はほめられる　柳次
初めから内助めあての嫁をとり　生々庵
立志傳内助のことに一寸ふれ　唐司
午前二時まだ内助の灯をともし　史葉
妻の健康たゞそれだけに支へられ　風來子
還暦に内助の功もたゝへられ　香林
世に出してから内助の妻は病み　默紅
内助の知ろこころ皺が目立つて來　八歩
栄轉の宴へ内助は低うゐる　潮花
記者團へ内助おろ〳〵して答へ　啄舟
妻として日にちまいにち米を撰り　塊人
叱られる事も内助の一つにて　無鬼
箒持つて女優の内助撮される　雲雀
默々と内助の母は老ひたまひ　夕鐘
市場まで内助の功の傘の穴　水府
妻がいてくれた内助の出世作　鳳石
交際の廣さへ内助ゆきとどき　祝平
脱稿に妻もうれしき観世縒り　孝三郎

## 川雑　濱寺支部句會（堺市）

六月十二日夕　於長德寺

### 映画・噂・自轉車

一ト昔とんで映画の子は育ち　眞佐男
おしつこを急く子映画でもてあまし　文蝶
末の子はエノケン姉は佐分利信　同
ロマンスシート映画キッスをするところ　好郎
映画見に誘うが恋の第一課　同
映画見て我れ純情が泣かされし　生々庵
儲けてる噂へケチをつけておき　好郎
噂には氣にせず養子よく動き　靜一路
人のふところ噂にしても氣にかゝり　生々庵
噂など氣にする裡は喰へてをり　圭井堂
ブレーキの効かない奴を貸してくれ　百生
自轉車がよけたが人も避けてゐた　同
間の悪さ米の重みでバンクする　同
傘を辞退した自轉車の走りよう　倍二
すいと來て自轉車を抜くつはめ也　同
自轉車の置場どうする門構へ　同
醉うたのが自轉車一台もてあまし　靜一路
嫁入の荷に自轉車も積み込まれ　圭井堂
陣痛へ産婆を積みに行くペタル　同
映画などを見てはうかいなバンクです　同
会場は二階で自轉車チト困り　生々庵
自轉車につまれて産婆馴れてはる　同
自轉車をかついで三階四階　好郎
自轉車の錠前二つ物々し　みのる

## 川柳雜誌　布哇支部　ウイロー社句會（ハワイ）

七月　於　東雲別莊

デマ黨の実現しない恩を悟り　山石

金を出す話になつて友は逃げ　柳村
遠慮ない二人涼しい月にあり　亭駒
指で喰ふボイをスプーンと世が変り　河舟
草分の英和日語のつぎをあて　自然生
長唄の三筋は冴えてキヤベ搖るゝ　流水
要る程は稼ぎ稼ぎて四疊半　一浪
失業と思へぬ指にプラチナが　快夢起
その後は安賃銀に働かず　長洲
尼さんの悩に図星顔に読む　笑有
夏休海へ山へと命がけ　野渉
救済を恩に被もせず被せもせず　泉水
大阪で闇をやつてゝ悉なし　魔花麗
明日知れぬ命を知つてゐて貯める　友郎
落ぶれた様に軒場で虫を聞く　潮風
葬式に今日は剃つてる親を見せ　夢樂子
美容院チト持て余す顔に会ひ　草一郎

川雑 **阿倍野支部句會**（大阪）

七月十七日夕　於　フタバカツブ

宮様・弁当・力

宮殿下社長になつて印を押し　文蝶
宮様も銀座を歩くノーハット　亞鈍
宮様の看板だけでよく流行り　一貫
宮様のお世辞も大分うまくなり　幽王
自轉車で走る宮様とはなれり　豆秋
宮様の寫眞はスター程もてず　種美
宮様もカストリの味覚へたり　路三
宮さんら寄つてごないしよ／＼　豆秋
宮様を眼で迎へては眼で送り　馬行
宮殿下利息のこわい事を知り　豆秋
軍服は拂ひ下たい宮殿下　文蝶
お忍びの宮も一枚宝クジ　晴峯
徐ろに殿下俗語の酒落を言ひ　小松園
ひろ辨當貰へる故に辞られず　一貫
月末の弁当箱はパンを入れ　小松園
釣れてゐる弁当しばし草の中　野介
案内狀弁当持参に見合せる　亞鈍
弁当の一番上にあるこうこ　幽王
宴會へ畫の弁当下げて行き　路三
芋丈の子の弁当は別に食べ　小松園
幕の内説明附で渡される　一貫
お弁当体の割に可愛らし　路三
弁当の味妻の味有難し　水客
握り飯ぬけ毛一本つまみ出し　文蝶
山賊し君とうれしくパンを持ち　晴峯
よち／＼と踏切番に弁当來る　無人
馬鹿力ありあまつての縄が切れ　一貫
ストライキ力入れすぎ負となり　晴峯
力一杯今日を働く男なり　路三
キリギリス脚の力を疑はず　亞鈍
力抜けたやうにホテルを出る草履　豆秋
母親をけりまくつてる兒の力　幽王
まざ／＼と金の力の中に生き　路三
万引の力を抜いた肩になり　水客
帰還した子の力瘤痩せてゐる　小松園
無力なる父なればこそ飯もたく　豆秋

川雑 **久賀支部句會**（山口縣）

六月五日　於　路三居

蛙・間違・座敷

市街地に成つたが蛙鳴いており　水郷
アベックの蛙をふんだ声となり　亞人
同姓の手紙の中味面白し　同
起きぬけに昨夜の下駄がたずねて來　猪太郎
間違つた文字懐しい母の文　路三
簞戸はめて誰も居らない夏座敷　不二
叱られる座敷へお茶をソッと置き　路三
座敷着のまんまよつてく仲のよさ　朗々

川雑 **篠山支部句會**（兵庫縣）

小西無鬼報

俄雨・アルバイト・鍵・花

恋人と別れ氣になる俄雨　良夫
俄雨あわてた程も降らず過ぎ　慶一郎
意地張りのつゝ走つてる俄雨　無鬼
俄雨女房を呼び子供呼び　同
アルバイト人には言へぬ靴磨き　良夫
アルバイト帰り映画と決めてゐる　無鬼
倉出しの鍵の來る間を煙草つけ　弘
たいそうに鍵かけて浴る夫婦風呂　慶一郎
白狀をせよとや鍵の音高く　無鬼
花賣りの心配な程抱えてゐ　慶一郎
誰か來るらしい花など活けてあり　無鬼

**日の丸句會**（鳥取市）

七月廿六日
於　日の丸自動車本社

百姓・煙草

お砂糖の洪水百姓とて困り　禎二
ダンサーのくわえ煙草が毒婦めき　重美

八月十三日

西瓜・名月・アルバイト・海

半分は捨てる西瓜の重さなり　日濤子
働いて食えぬこの世に今日の月　同
アルバイト親養えるほど儲け　秋男
押賣と間違えられたアルバイト　正雄
アルバイト世間はそうでないを知り　日濤子
お客様を海にとられた映画館　滋治
あげた手のおろせぬ汽車で海につき　義宏
海がもつ魅力藝術見逃さず　日濤子

川雑 **日立櫻島句會**（大阪）

七月二十六日　南鼓扇報

團扇・蚤

ひやかせば團扇で頭叩かれる　紫雲
蚊張の波やんで團扇もれたらしい　定美
嫌な客團扇も出さず追かへし　河童子
節米のおカユ團扇であをひでる　清潮
子をあやす團扇の骨は出てしまい　一舟
飯もたく團扇で顔をあふがれる　競花
れつく子へ團扇の風もやはらかく　秋花
珍客へ團扇ヨチ／＼居けられ　同
水團扇膝に流れる蚊やり香　香林
來客へ蚤をおさへたまゝで立ち　鳩花
蚤を取る猿へ無慈悲な石を投げ　一球

川雑 **あざみ婦人句會**（大阪）

伊藤定美報

宵待草船から煙あびてゐる　美奈子
宵待草月のない夜がもの足らず　定美
大阪がこんなに焼けて月見草　暐子
つかれたる娑宵待草の畫　若菜
悲しみも知らず宵待草のうた　同
月見草咲けど浴衣の君なくて　同
ちと派手な柄もうれしく着て十九　美代子
ミスボリス十九の意氣が逞ましい　定美
恋のない髪が淋しい十九の娘　千代子
十九十九若さへ雲が飛んでゐる　ひさみ
十九にもなつてと母に叱られる　花美
兄ちやんも十九になつた髪を分け　和子
農村に生れ十九で嫁にゆき　花子
舞扇十九の春を披露する　万亀子
妹や母をかゝへてゐて十九　花代子
始末書に十九と書いてためらはず　鮎美

**DONの夕**（大阪）

六月廿五日　於　ドン喫茶店

五月雨

さみだれて思はぬ人の肩が触れ　小松園
五月雨にボショ／＼と勤めに出　幽王
五月雨へ看護婦さんはただ白し　潮花
足の爪きつて見上げる五月雨　おさむ
五月雨で柳おもたいさがりよう　緑雨
無理をした雨具五月雨御存知か　水車
さみだれに蛙は浮いたまゝ流れ　豆秋
五月雨へはむかうとに稼ぎに出　夕鐘


**阪田謄寫版**

大阪市北區芝田町二五

株式會社 **阪田商會**

電話 福島一六三九番

のりば 上六
摂・河・泉展望コース 4キロ
奈良日曜山めぐりコース 12キロ
赤目探勝コース 13キロ
のりば アベノ橋
羽曳山コース 9キロ
河内飛鳥玉手山コース 14キロ
二上岩屋コース 13キロ
●電体都市開始 コース表進呈
お問合せは
大阪●上六 近鉄 上本町 営業課
〃アベノ橋 近鉄 天王寺 営業課

ハイキング割引乗車券を發賣いたします

趣味と教養の殿堂
松坂文化クラブ
會員募集
課目
舞道（小原流・末生流）
茶道（表千家流・宗偏流・花月庵流）
洋裁・書道・日本畫
箏曲・聲樂
手藝・古典・新舞踊
長唄・小唄・謠曲
服飾デザイン
詳細お問合せは
七階文化クラブ事務所へ
松坂屋
大阪日本橋
電南一一七一番

世界ニ誇リ得ル最高級品
バターフライブランド
ヤマハ●バンドハーモニカ
浜松市 日本樂器製造株式會社
支店出張所所在地
東京・札幌・濱松・名古屋
大阪・神戸・福岡
大阪支店
大阪市南區心齋橋筋二丁目角

紙業界の覇者フタバチエーン
藥用・化粧品用・あらゆる紙器
特殊紙器工業株式會社
紙カップ及食堂用紙製品
フタバカップ株式會社
大阪市阿倍野區晴明通一ノ四〇 電天下茶屋 2802 2808
あらゆる印刷
凹凸印刷紙業株式會社
大阪市阿倍野區松虫通一ノ一六電天下茶屋2391


## 卓上語

しばらく忘れてゐたランプが、チョイ〳〵顔を見せてくれる。あまりうれしくない現象だ。しかし米は豊作だそうな。

○

番傘がゴタ〳〵してゐる。困つた話だ。僕も時々引ッ張り出される。僕は是々非々主義だ。

○

幾ら大阪が商賣どこでも、商賣と川柳を一緒にしてもらつては困る。

○

本号の表紙は柴谷宰二郎画伯を煩はした。

○

記事が輻輳するので、増ページのまゝで押してゆくことにした。その代りと云つてはおかしいが定價も二〇円にした。

○

大会のあとがたづけや何やかで発行日が、ずれてしまつたので、九・十月の合併号で氣分を新にすることにした。

○

川柳忌が九月なので本号へは福田山雨楼氏の「川柳語原考」冨士野鞍馬氏の「川柳作家としての朱樂管江」阿達義雄氏の「島津の轡紋と品川情調」等の古川柳関係の研究記事を掲げることにした。味読されたい。その他小畑自有朗氏の「漫筆は動く」東野大八氏の「柳誌の反省とその將來」「雑筆春秋」の記事などでかなり賑やかだ。須崎豆秋氏から葭乃に送つた「手紙」は句作に関するものだけに興趣が深い。

○

各地柳壇には相当スペースを割いたが、まだ次号へ割愛したものが多い。諒とされたい。

## 募集

### 課題吟募集

藥瓶（十句）市場没食子選（十月五日締切）

上役（十句）月原宵明選（十一月五日締切）

### 毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雑詠十句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。


B列5号 毎月1回1日発行
川柳雑誌 第三卷 第八号
一冊 金二〇円（送料二円）
（載轉禁）
半ケ年概算 金一三二円
一ケ年概算 金二六四円
昭和廿三年九月廿五日印刷
昭和廿三年十月一日発行
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉區万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
振替口座 大阪 七五〇五〇